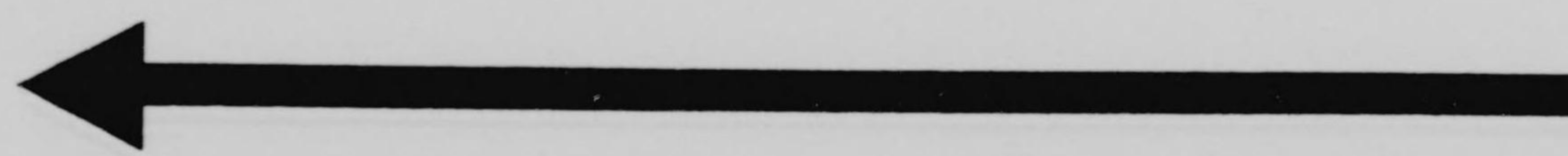


377
126



始



外 2067

377-126



和辻哲郎 著

再興

岩波書店刊行

大正七年版

大正
7.12.24
内交



あつたての
あつたての
あつたての
あつたての

鵠沼の松林と砂丘との間に送り
しさまさまの日の思出にこの書
を阿部次郎安倍能成兩君に獻ず

序言

偶像破壊が生活の進轉に缺くべからざるものであることは今更繰り返す迄もない。生命の流動はたゞこの道によつてのみ保持せらる。我等が無意識の内に不斷に築きつつある偶像は、注意深い努力によつて、また不斷に破壊せられねばならぬ。

しかし偶像は何の意味もなく造られるのではない。それは生命の流動に統一ある力強さを與へるべく、また生命の發育を健全な豊満と美とに導くべく、生活にとつて缺くべからざる任務を有する。これなくして人は意識の混沌と欲求の分裂との間に萎縮し了らなくてはならぬ。人が何らか積極的の生を營み得るためには「虚無」さへも偶像であり得る。

偶像が破壊せられなくてはならないのは、それが象徴的の効用を失つて硬化する故

である。硬化すればそれはもう生命のない石に過ぎぬ。或は固定觀念に過ぎぬ。けれどもこの硬化は、偶像そのものに於て起る現象ではなく、偶像を持つ者の心に起る現象である。彼らにとつて偶像は破壊せられなくてはならぬ。しかし偶像そのものは依然としてその象徴的生命を失はない。彼らにとつて有害なるものも、その眞の効用を解する他のものにとつては有益で有り得る。偶像再興が生活にとつて意義あるはそのためである。

二

文字通りの「偶像」に就て考へて見る。

使徒パウロは偶像を排するに火の如き熱心を以てした。彼の見た偶像は眞實の生の障礙たる迷信の對象に過ぎなかつた。彼が名もなき一人のさすらひ人として雅典の町を歩く。彼の目にふれるのは偶像の光榮に浴し偶像の力に充たされたと迷信する愚昧な民衆の歡醉である。彼らは鏡鏡や手銅鼓や女夫笛の騒々しい響に合せて、淫らな亂

暴な踊を踊つてゐる。さうしてその肉感的な陶醉を神への奉仕であると信じて居る。更に甚だしいのは神前に捧げる閨人の踊である。閨人達は踊りが高潮に達した時に小刀を以て腕や腿を傷つける。さうして血みどろになつて猛烈に踊り続ける。それを見まもる者はその血の歡びを神の恩寵として感じて居る。その彼らはまた處女の神聖を神に捧げると稱して神殿を婚姻の床に代用する。性欲の神祕を神に歸するが故に、また神殿は娼婦の家ともなる。パウロはそれを自分の眼で見た。さうして「いたく心を痛めた。桂の愛らしい緑や微風にそよぐプラタアネの若葉に取巻かれた肌の美しい女神の像も彼には敵意の他の何の情緒をも起させなかつた。臺石の廻りに咲き亂れてゐる堇や薔薇、その上にキラ／＼と飛び廻つてゐる蜜蜂、——これらの小さい自然の内にも、人間の手で造つた偶像よりは遙かに貴い生が充ち亘つてゐる。彼は興奮してアゴラへ行つて人々に論じかけた。エピクリアンの哲學者が彼の相手になる。偶像の迷信を彼が攻撃すると、哲學者も迷信の弊を認めて同意する。彼はそれに力を得てイ

エスの復活を説き立てる。哲學者は急に熱心になつて靈魂不滅の信仰が迷蒙に過ぎないこと。この迷蒙を打破しなければ人間の幸福は得られないことを説いて彼を反駁する。彼は全能の造物主を恐れないのかときく。哲學者はこの世界が元子の離合集散に過ぎないこと、現世の享樂の前には何の恐るべきものもないことなどを答へる。パウロは益々熱して永生の存在を立證する彼自身の體驗に就て語り始める。物見高い雅典人は——「唯新しきことを告げ或は聞くことにのみその日を送れる」雅典人は、また一つの新しい神が輸入せられさうになつたことに非常な興味を起して、アレオ山の裁判場へ彼を引張つて行く。そこには或事件の傍聽のために多數の市民が集まつてゐる。事件の判決が済むと、餘興をでもやらせるやうな調子で彼が呼び出される。君は珍しい話を知つてゐるさうだが、一つその新しい宗教といふのを説明して貰ひたい。

パウロは山頂の石壇に上り、アクロポリスの諸殿堂と相對して立つた。——雅典の市民諸君。諸君の市は神々の像と殿堂とに覆はれてゐる。諸君はその神々を祭るため

に眠りをも忘れて熱中する。けれども諸君はこの神々に眞に満足してゐるか。予は散歩の途上、諸君の禮拜する所を見て歩いた時に、「知らざる神に」と刻りつけた一つの祭壇を見出して非常に驚いたことがあつた。諸君の中には確に或未知の神への憧憬が動いてゐるのである。予の神はこの、諸君が知らずして禮拜するところの神である。諸君はあの祭壇に、人間の手で作つた神を据えなかつた。それはまことに正しい。萬物の造主である活ける神は、人の工と巧を以て石から造られる神とは違ふ。それは手で造つた殿堂に住まない。また人の手で犠牲を捧げられることを要せない。それは生命の根據である。人間の造り主である。何で人間の手を借りる必要があるだらう。諸君はこの活ける神を信じないか。そのひとり子をこの世に送り、彼を死より甦へらせて明かな證を我々に示したこの大いなる神を信じないか。云々。

——このパウロの熱心は、とにかく千數百年の後まで權威を持ち續けた。たとへ偶像禮拜の傾向が聖母崇拜や使徒崇拜などの形で生き残つて行つたとしても、美しい希

臘諸神の像は遂に中世の闇の内に隠れてしまつた。八世紀の偶像破壊運動は、基督教の聖者像をさへも寛容しやうとしないものであつた。

やがて新しい時代が来た。地を掘る反基督の徒は穴の底から歡喜にふるえる聲で「偶像、偶像」と呼んだ。古代の赤煉瓦の壁の間に女神の白い裸身は死骸の如く横はつてゐる。さうして千年の闇のうちに初めて光を、炬火の光を、ほのあかく全身に受ける。ヴァイナスだ、ブラキシテレスのヴァイナスだ、と人々は有頂天になつて叫ぶ。やがてヴァイナスは徐々に、地の底から美しい體を現はして来る。

或者は恐怖のために逃げ去らうとする衝動を感じた。しかし奇妙な歡びが彼の全身を捕へて動かさせなかつた。それが地獄の劫火に焚かるべき罪であらうとも、彼はその艶美な肌の魅力を斥けることが出来ない。そこに新しい深い世界が展開せられてゐる。魂を悪魔に賣るともこの世界に住むことは望ましい。

それが新時代の大勢であつた。地下の偶像は皆蘇つて、再び太陽の下に打ち立てら

れた。狂熱的な僧侶の反動もたゞ大勢に一つの色彩を加へたに過ぎなかつた。しかし再興せられた偶像はもはや禮拜せらるべき神ではない。何人もその前に畜獸を屠つて供へやうとはしなかつた。何人もその手に自己の運命を委ねやうとはしなかつた。人々に身震ひさせたのはそれが異端の神であつた故ではなくして、それが美しかつたからである。偶像は禮拜せらるべき神であつた限りに於て、當然パウロの排斥を受くべきであつた。しかし美の故に禮拜せらるべき藝術品としては、確かにパウロから不當な取扱ひを受けた。今やその不當な取扱ひは償はれ、たゞ藝術品としての威嚴を以て人々の上に臨んだのである。

かくの如き偶像の再興はまた千年に亘る教權の壓迫への反抗をも意味した。偶像再興者の眼より見れば、教權こそは破壊せらるべき偶像に過ぎないのであつた。遂に古い偶像の再興は新しい偶像の破壊の蔭に隠れた。古い偶像と共に力強く再興した唯物論も、新時代の自然科學的運動の動機となりながら、その花々しい新眼界展開の蔭に

隠されてしまった。

文藝復興の運動はいろいろの意味で偶像破壊の運動だったがに相違ない。しかし根本に於てはそれは字義通りに古代の復興である。古代の内の不滅なるものを復興する事によつて、新しい運動はその熱と力を得たのである。

偶像は再興せられた。パウロの神は或意味で死なねばならなかつた。

三

基督教の「神」もまた一種の偶像である。パウロは「人間の手」によつて造られた偶像を排斥した。近代の偶像破壊者は「人間の頭」によつて造られた神を排斥する。しかしパウロが偶像を滅盡し得なかつたやうに、近代の偶像破壊者も亦神を滅盡することは出来ない。「神は死んだ」といふ喧しい宣言のあとで、神を求むる心は忍びやかに人々の胸に育つて行く。

基督の復活を認容することの出来なかつた物質論は今や人類の常識である。神が七

metaphysical
speculation

日にして世界を創造したといふ物語の如きは「物語」以上に何の權威をも持たない。處女懐胎は狂信者の幻想に過ぎぬ。神の子の信仰は象徴的の意味に於てさへも形而上學的空想以上の何物でもない。世界は確かに古昔の元子論者が見た如く或基本要素の離合集散によつて生じたのである。靈魂は肉體の作用であり肉體と共に滅びる。死とは活動の休止であり組織の解體であるが故に死後の生があるわけではない。この事實から眼をそむけて神と死後の生とを假構するのは、現實をありのままに受容するに堪へない卑怯者の所作に過ぎぬ。かくの如き常識にとつては「神が死んだ」といふ宣告の如きはもはや何の刺戟にもならない。神はもどく存在しなかつたのである。そこで人間は現世の欲望の満足を唯一の目標として生活する。彼を束縛するものはたゞこの満足のための功利的節度の他に何物もない。

しかし人はこの物質的な世界に何の不足もなく安住することが出来るか。愛の歡喜にある時彼はその幸福の永遠性を望まないか。官能の悅樂のあとで彼はその果敢なさ

に苦しまないでゐられるか。痛苦を堪へ忍ぶ時彼はこの生が生理的偶然に過ぎないといふ考へを悦ぶことが出来るか。——この間に「否」と答へる人の多いことは解つてゐる。しかし「然り」と答へる人も亦多數であることは否み難い。そこで問を新しくする。人はこの常識以上に深い神秘を自然に求めないでゐられるか。愛の神秘、官能の秘密、生活の底知れぬ深み、それを纏まうとしないでゐられるか。恐らく何人も曾て一度はこれらの要求をその胸に抱いたであらう。或人々は遂にこの要求に全心を占領させるのである。科學の道に入れば彼は自然と人生とに現はれた微妙な法則に驚異して或知られざる力に衝き當らすにはゐられない。哲學者としては彼は生命の創造力の無限に驚いて人智の彼方に廣い世界を認めることになる。——偶像は再び求められるのである。

神は再び蘇へらなくてはならぬ。それが基督再臨によつて證せられるか否かは我等の知るところでない。我等は神を知らない。しかし我等の生が神と交通し得るものであるべきであるか。恐らくそれらの名は新しいパウロによつて鬼神として斥けらるべきものだらう。我等は「知らざる神に」祭壇を築いて、その神を説きあかすべきパウロの出現を待つ。さうして近代精神の造り出したあらゆる偶像の破壊を期待する。

右の如き偶像の破壊と再興とは、十九世紀末の大いなる個人の生活によつて例示せられた。トルストイは前半生に於て自然の勝利を、自然的欲望の勝利を歌つた人である。然し後半生に於ては忠實な神の僕であつた。ストリンドベルヒは自然主義の精神を最も明かに體現した人である。しかし晩年には神と神の正義との熱心な信者であつた。デカダンの詩人が最後に神に歸らなければならなかつたとも人の知る所である。

彼等は偶像再興の先驅者であつたのか。もし既に彼らが先驅者であつたとすれば、二十世紀初頭の兵亂と災厄との前で、人々はこの新しい道を凝視しなければならぬ。

四

破壊せらるべき偶像がまた再興せらるべき権利を持つといふ事實は、偶像破壊の瞬間に於ては殆んど顧みられない。破壊者はたゞ對象の堅い殻にのみ目をつけて、その殻に包まれた漿液のうまさをおぼれてゐる。しかし生活を全的に開展せしめやうとするものは、この種の偏狭に安んじてはならない。これ偶像破壊者の危機に對する最第一の警告である。

予は自ら知れる限りに於て生れながらの反逆者であつた。小學の兒童としては補正成を非難する心を持ち、中學の少年としては教育者の僭越と無精神とを呪つた。教育者の權威に煩はされなくなつた時代には儕輩の愛校心を嘲り學問研究の熱心を輕蔑した。さうして道德と名のつくものを蔑視することに異常な興味を覺えた。宗教は予を

制壓する權威でなかつたが故に好んで近づいたが、しかし何等かの權威を感じなければならぬ境地までは決してはいつて行かなかつた。寧ろそれを他の權威に對する反逆の道具に使つたに過ぎなかつた。遂には生活そのものの權威に對してまでも反逆の態度をとつた。深い愛を會て體驗したこともないくせに愛を冷笑することを喜び、教權の壓力を會て感じたこともないくせに神の死を喝采した。それは當時の予にとつて人間生活の最高の階段であつた。さうしてかくの如き氣分と思想とが漸次近代偶像破壊者の模倣に墮して行つたことには、遂に思ひ及ぶところがなかつた。

予は當時を追想して烈しい羞恥を覺える。しかし必ずしも悔いはしない。淺薄ではあつても、とにかく予としては必然の道であつた。さうしてこの齒の浮くやうな偶像破壊が、結局、その誤謬を以て予を導いたのであつた。予は病理的に昂進した欲望を以て破壊に従事した。行き過ぎた破壊は予を虛無の淵にまで連れて行つた。偶像破壊者の持つ昂揚した氣分は、漸次予の心から消え去つた。予は或不正のあることを

豫感した。反省が予の心に忍び込んだ。そこで打碎いた殻のなかに美味な漿液のあることを悟る機会が予の前に現はれた。予はそれを掴むと共に豊富な人性の内に蘇へつた。

そこに危機があつた。さうして突破があつた。この體驗から予の警告は生れたのである。

五

予は道義を説く。愛を説く。或人はそれを陳腐と呼ぶだらう。しかし予は陳腐なるものの中に新しい生命を見出した喜びを語るのである。陳腐なる殻のうちに秘められたる漿液のうまさやうとするのである。陳腐なるものは生命を持たないとする固定觀念に捉はれたものは、先づその鈍麻した感覺をやり起して自らの殻を悟るがい。さうしてその殻を破るために鐵槌を振ふがい。その時に初めて偶像再興に對する新しい感覺が目ざめて來るだらう。

しかし予はたゞ「古きものの復活」を目ざしてゐるのではない。古きものも蘇へらされた時には古い殻をぬいで新しい生命に輝いてゐる。そこにはもはや時間の制約はない。それは永遠に若く永遠に新しい。予が目ざすのはかくの如き永遠に現在なる生命の顯揚である。予はあらゆる偶像の胸を通する一つの大きい道を感じ取る。さうして過去未來に亘る全人類の努力が必竟この道に向つて集まつてゐることを感ずる。永遠に現在なる生命はこの道の上にあつて踴躍するのである。予はその光景を描き得むことを願ふ。

大正七年十月

休戦提議の號外を傍に置きて

和辻哲郎

目次

體驗と思索

- 一 轉 向……………三
- 二 生きることを作ること……………二八
- 三 ペエトオフエンの面……………四九
- 四 放浪息子の歸宅……………五六
- 五 情欲と淨化の要求と……………六七
- 六 幼稚と云ふこと……………六九
- 七 或思想家の手紙……………七四
- 八 停車場で感じたこと……………九三
- 九 夏目先生の追憶……………一二

一〇 人間の心理には……………一三六

一一 懐疑と信仰……………一四一

一二 世間の評判……………一六九

一三 總ての芽を培へ……………一七九

一四 衆愚……………一九一

一五 公衆の喝采……………一九八

一六 嘲笑と自欺……………二〇一

一七 杞憂……………二〇五

一八 自由……………二〇九

一九 非難を受くる心持……………二一〇

二〇 心と言葉……………二二七

二一 樹の根……………二三七

思索と藝術

一 リップスとニイチェ……………二四七

二 リップスの個人主義……………二五五

三 リップスの警告……………二六一

四 「自然」を深めよ……………二六八

五 藝術批評……………二八四

六 競争……………二八七

七 告白と廣告……………二九一

八 三つの視點……………三〇〇

九 創作の心理に就て……………三一九

一〇 聖者と藝術家……………三二九

一 苦言……………三四四

藝術と文化

一 文化……………三五九

二 世界の變革と藝術……………三六六

三 「戦争目的」の評判……………三七九

四 デモストラエネスの没落……………三九六

五 日本は何を誇るか……………四一九

六 偶像崇拜の心理……………四三〇

體驗と思索



一 轉 向



過去の生活が突然新しい意義を帯びて力強く現在の生活を動かす初めることがあ
 る。その時には生のリズムや轉向が著しく過去の生活に刺戟され導かれてゐる。さう
 して過去の過去が「過ぎ去つて」はゐないことを思はせる。機縁の成熟は「過去」が
 現在を延ばし、「過去」が現在の内に成長することに外ならなかつた。今にして私は
 「過去を改造する意味」の意味が漸く解りかけたやうに思ふ。

「過去の重荷」押し潰されるやうな人間は、畢竟滅ぶべき運命を擔つてゐるのであ
 つた。忘却の甘味に救はれるやうな人間は、「生きた死骸」になる筈の頽廢者に過ぎな
 かつた。潰滅よりも更に烈しい苦痛を忍び、忘却が到底企て及ばざる突破の歡喜を追
 ひ求むる者こそ、眞に生き眞に成長する者と呼ぶべきであつた。心が永遠の現在で

あり、意識の流れに永遠が刻みつけられてゐることを、たゞこの種の人のみが生
活によつて證明するだらう。

二

曾て親しくIやJやKなどに友情を注いだと云ふ記憶が私を苦しめる。彼等を「愛
した」故に悔むのではない。「彼等の内に」自分を見出したことが堪らなく厭なので
ある。しかし私は自分の内に彼等と共鳴するものゝあつたことを——今猶あることを
拒むことが出来ない。それ故に猶更その記憶が私を苦しめる。曾て私はあの傾向に全
然打ち敗けてゐたに相違なかつた。

けれどもまた彼等から斷然冷かに遠のいた記憶が同じやうに私を苦しめる。(勿論そ
の苦しみはこの轉向の二三年後に初まつた。さうして恐らく新しい轉向を準備して呉
れるのだらう。私はそれを望む。)——とにかく私は自分の愛があまりに狭く、あまり
に主我的ではなかつたかを疑ひ始めた。私は彼等の「傾向」を憎んでも人間を憎むべ

きではなかつた。彼等の傾向を捨て、も人間を捨てるべきではなかつた。私は道を求
めつゝ道に迷つたやうに思ふ。

私は徹底を欲して斷然身を處した。さうして今はその徹底のなかゝら不徹底の生れ
出たのを見まもつてゐる。私は二つの苦しみのいづれからも脱れることが出来ない。

三

何故に私は彼等を愛したか。

第一の理由は直接的である。私は彼等が好きであつた。彼等の顔を見、彼等と語る
ことが限りなく嬉しかつた。さうして私は彼等の内に勇ましい生活の戦士を見、生の
意義を追ひ求める青年の焦燥を共にし得ると思つた。彼等の雰圍氣が青春に充ち、極
度に自由であることを感じた。彼等の疎暴な無道德な行爲も、因襲の壓迫を恐れな
い眞實の生の冒險心——大膽に生の渦巻に飛び込み、死を賭して生の核實に迫つて行
く男らしい勇氣の發現として私の眼に映つた。かくて私は彼等の人格と行爲との總て

に愛着を持ち續けた。

「私は私の心を常に彼等の心に觸れ合はせやうと欲した。しかし時の經つと共に、私は彼等がシンミリした愛情を求めてゐないのに氣付いた。彼等が尙ぶのは醉歌であつた、狂氣であつた、機智であつた、露骨であつた。總て陽氣と名の付かないものは、彼等の心を喜ばせるに足りなかつた。彼等は胸に泌み入る靜かな愛の代りに、感覺を揺り動かす騒々しい情調を欲した。かうして私はたゞひとり取り残された。私の愛は心の奥に秘められて、遂に出ることが出来なかつた。」

この隙に第二の理由が匍ひ込んだ。私の内の Aesthet はそこに極めて好都合な成長の地盤を見出したのである。私の Aesthet は Sollen を肩から外して、地に投げつけて、朗かに哄笑した。私は手先が自由になつたことを感じた。一夜の内に世界は形を變へた。新しい曙光は^{ほし}撞な美と享樂とに充ちた世界を照らし初めた。かくて私は彼等の生活に Aesthet らしい共鳴を感じ得るやうになつた。

そこで私は彼等を彼等の世界の内で愛した。それは共犯者の愛着に過ぎなかつたがしかし私はそれを秘められた人間的な愛の代償として快く迎へた。その世界では彼等は皆私の先達であつた。彼等は私の眼に、世界と人間とが盡くることなき享樂の對象であることの、具體的な證左であつた。その頃の私には Sollen の重荷に苦しむ人が笑ふべく怯懦に見えた。享樂に飽滿しない人が恐ろしく貧弱に見えた。I や J や K が眞に愛着に價する人間に見えたのも不思議ではない。

四

何故に私は彼等を憎んだか。

それは私が彼等の如き Aesthet ではなかつたからである。私が Sollen を地に投げたと思つたのは錯覺に過ぎなかつた。Sollen は私の内にあつた。Sollen を投げ捨てるためには、私は私自身を投げ捨てなければならぬのであつた。私は自分の内に Aesthet のあるのを拒むことは出来ないけれども、私自身は Aesthet でなかつた。かくて

私は一年後に、Aesthet の如く振舞つた故を以て烈しく自己を苛責する人となつた。

私は彼等を受した自分から腐敗の臭氣を嗅ぐやうに思つた。そこには生の眞面目は枯れかゝり、核心に迫る情熱は冷えかゝつてゐた。生の冒險の如く見えたのは、遊蕩者の氣儘な無責任な移り氣に過ぎなかつた。生の意義への焦燥と見えたのは、虚名と喝采とへの焦燥に過ぎなかつた。勇ましい戦士と見えたのは、強剛な意志を缺く所に生ずる駄々兒らしい我儘の故に過ぎなかつた。私はその時までその臭氣に氣附かないでゐた自分を呪つた。道徳的には潔癖であるさへ思ひ習はしてゐた自分が、汚穢に充ちた泥溝の内に晏如としてあつた、と云ふ事實は、自分の人格に對する信頼を根本から揺り動かした。

腐敗はそれのみに留まらなかつた。私は何時の間にか愛の心を輕んじ侮るやうになつてゐたのである。私は人間を見ないで享樂の對象を見た。心の濃淡を感覺の上に移し、情の深さを味はひのこまやかさで量り、生の豊麗を肉感の豊麗に求めた。さうし

て總てを變化の故に、新味の故に尙んだ。かうして私は生の深秘を掴むと信じながら、常に核實を遠退いてゐたのであつた。それ故に私は眞の勇氣を怯懦と感じ、眞の充溢を貧弱と感じた。それ故に私は腐臭を帯びた人間を價值高きものとして尊敬した。嗚呼。何と云ふ自分だらう。私は何物をも愛しないで、ただ冷やかに（たとへ感傷的であつたとしても）たゞ無責任に（たとへ金と約束とに於て責任を負つたとしても）總てを味はつて通らうとした。さうして彼らが私の腐敗の具體的證左となつた。

私は自分を呪つた。彼等をも憎んだ。彼等を受することは、私には腐敗を受することと同義になつた。彼等を受したといふ記憶は自分が腐敗したといふ記憶に外ならなくなつた。この記憶ある限り私は、時々自分の人格を疑はないではゐられない。腐敗を憎む限り私は、彼等をも憎まないではゐられない。

かうして私に一つの轉向が起つた。

五

然らば何故に私は彼等を捨てたことを苦しむのか。

私は自己の生を高める情熱に壓倒せられて、曾て嬉しかったものが厭で堪らなくなつた。私は此の轉向をどうすることも出来なかつた。親しく交はつた彼等に對しても手加減をする餘裕などはなかつた。好きであつた時に逢ふことを好んだやうに、厭になつた時には逢ふことを厭がつた。表面上に交誼を續けて薄情の譏を避けるなどは、私には到底出来ないことであつた。私は徹底を要求するために、態度の不純に堪へ得ないがために、遂に彼等を捨てた。——それを何故に苦しむのか。

われわれのやうに小さい峠を乗り越えて來たものも、また自己を高める道の殘酷であることを感じないではゐられない。神の道は峻しい、神は殘酷だ、と云つた哲人の言葉がしみじみと胸にこたえる。——もとよりこの場合に私は自分の行爲が「大きい不幸」を醸したとは思つてゐない。何故なら彼等の心はこの事によつて痛みを感じるにはあまり不死身だからである。しかし私は彼等が不死身であるか否かを考量した後

に彼等を捨てたのではなかつた。私にとつては、彼等が痛みを感じる程度よりも、「曾て親しかつた者を捨てた」といふ行爲その者が問題になるのである。従つて人を傷けたか否かよりも、人を傷ける行爲をしたか否かゝ問題になる。私は正しく彼等の信頼を裏切つた。私の心には裏切られた人の寂しさが頻りに思ひ浮べられる。それだけで私には苦しむに充分である。

私は近頃T氏が總ての訪客を拒絶するといふ記事に度々出逢ふ。私はあれほど親切で優しかつたT氏がそのやうな殘酷を敢てし得るのかと不思議に思つてゐる。何故なら私はT氏を訪ねて行く若い人たちの眞面目に道を求める心持に、今なほ或種の同感を持ち得るからである。しかしまた私は、愛することを欲してゐるT氏が好んで殘酷を擇んだ苦しさを理解し得るやうに思ふ。さうしてT氏をその心持に押しつけて行つた責任を自分も亦別たなければならぬと感ずる。T氏に訪客と逢ふことの果敢なさを經驗させたのは訪客自身であつた。私たちは病人が醫藥を求めるやうにT氏から

愛と智を求めながら、やがて路傍の人のやうに冷淡になつた。時折なつかしい心で T 氏のことを思ひ出しても、それを傳へるだけの熱心がない。それが如何に T 氏の心を傷つけたかに就ては、私たちはあまりに無知であつた。T 氏も亦弱い所の多い求道者であることを、與ふると共に受けなければならぬ乏しい愛の藏であることを、私たちはあまりに知らな過ぎた。私は T 氏に對して濟まないと云ふ思を禁することが出来ない。

僅かに三四度逢つた T 氏に對してさへさうである。まして彼等の場合は。——何と云つても I や Y は寂しいだらう。私を失つたためよりも、私の別離が凶兆として響いたために。——かう私は考へる。私は薄情であつた。さうして唯一つの薄情でも、人生の果敢なさを思はせるには充分であつた。彼等の鼻端の強い誇り心は恐らくこの事實を認めまいとするだらうが、彼等の認めると否とに關はらず、私は彼らを傷つけたことを信じ、さうして絶えず濟まないと思ふ。

私は自己を高めるために薄情を避けなかつた。しかしどんな背景があらうとも、薄情であつたことは苦しい。私はどうにかして彼等を受し續けたかつたと思ふ。彼等の内にも愛らしい所がひそんでゐたらうにと思ふ。私にそれが不可能であつたことは私の愛の弱小を證明するに過ぎないだらう。私は彼らをも同胞として抱擁し得るやうな大きい愛を嘯みたい。私はさういふ愛の芽生が力強く三月の土を掻げかゝつてゐるやうに感ずる。

春が來た。春が來た。眞實の生の春が來た。總てはこれからだ。

六

私は彼等を再び愛し得るやうになつても、彼等を動かしてゐる傾向を再び愛することは、決してあるまい。

この傾向を焦點として見れば、彼等は享樂の他に生活を持つてゐない。彼等は共に全身を以て、全生活を以て享樂しやうとする。彼等は内面外面のあらゆる道徳を振り

捨て、人の恐れる「底」に沈淪する事を喜ぶ。聖人が惡とする所は彼等には善である。しかもそれは惡と呼ばれる故に一層味ひが深い。眞情、誠實、生の貴さ、緊張した意志、運命の愛、——これらは彼等が唾棄して惜しまない所である。個性が何だ、自己が何だ、永遠の生が何だ、それらはよくよかな女の乳房一つにも價しない。乾物のやうな思想と言葉とを振り捨て、汝の心奥の聲を聞け。汝の核實は、汝の本能は、生の美しさをのみ求めてゐるだらう。肉の *delicacy* 感覺と感情の醉歎、そこにのみ最高の美があるのだ。氣儘な興奮と浮氣な好奇心となげやりな勇氣とがそれを汝に持ち來たすだらう。それを外にして何處に最も好く生きる道があるのだ。かう彼等は云ふ。これも一つの人生觀である。一つの態度である。しかし私はそれを征服すべく努力するやうに運命づけられてゐる。私にとつては生は精神的に無窮に深い。生の美しさは個性と持續とのなかからのみ閃めき出る様に思へる。断片的な享樂の美は私には迷はしに外ならない。

またたとへそれを一つの態度として許しても、そこには内在的な批評の餘地があらうと思ふ。即ち彼等は果してその態度を徹底させてゐるか。もしくは徹底させやうといふ要求に燃えてゐるか。——私は思ふに、彼等日本 *Aesthet* の危険は、*Aesthet* としてさへも徹底し得ない所にある。もしくは徹底しやうと欲しない所にある。彼等は遂に如何なる意味の生活をも築き得ない危険に瀕してゐる。——例へば彼等は嘘をつく。嘘は *Aesthet* にとつて捨て難い味のある方法に相違ない。しかし彼等ともすれば嘘を以て社會と妥協しやうとする。しかも驚くべきことには、彼等はその嘘を意識しないのである。彼等は時に情の厚い誠實な男として振舞ふ。さうして自らさうだと信じてゐる。そこへ或事件が起る。彼等は極度の不誠實を現はす。しかもなほ自ら誠實な男だと信じてゐる。最も徹底したやうに見える丁に於てさへもさうである。彼はその全興味を注いで、享樂を尊重するために、人間の尊貴と美とを蹂躪するやうなものを書く。そこでは彼は惡と醜の讚美者である。しかも彼を惡人と呼び醜怪と呼ぶ者に對し

て彼は怒る。製作の上では價値を倒換しても、日常生活に於てはその倒換を欲しない。

視點を製作にのみ限る時には、事情は稍異つて来る。この範圍でJは態度の純一を缺かない。彼は官能享樂にのみ價値を認めて、誠實にそれを徹底させる。製作に於ては決して嘘をつかない。彼の製作の趣味が低劣だといふ批評は倫理的立場から来るのであつて彼の態度の不純によるのではない。それに比べると趣味が上品で奇麗だとせられるIの製作は態度の不純のために堪らなく愚劣に感じられる。彼は内心に喜んでゐながら恥ぢたらしく装ふ。歡喜を苦痛として表現する。凡てが嘘である。——Kはその軟弱な意志の故に Aesthet として生きてゐる。彼は他の世界にはいらうとして躓く。さうして常に官能の世界に歸つて来る。しかしそこでも彼は落ちつくことが出来ない。彼は絶えず自分を嘲つてゐる。彼は Aesthet として徹底するには、あまりに精神的であり、またあまりに精神的でなさ過ぎる。もし彼に強い意志があつたならば、

さうして Aesthet となるべく運命づけられてゐるならば、彼は先づ精神的傾向を彼がなしたよりもつと深い所まで押し詰めるだらう、さうしてそれを地に打ち砕くだらう。それは Aesthet として徹底する道であると共に、また更により高い世界へ轉向する可能性を激成する道である。けれども彼にはそれが無い。彼の製作は如何にも突き入つて行く趣を缺いてゐる。總てが核心に觸れてゐない。

このやうな三人の相違は、ふと私に三つの聯想を起させた。Jには Faun の面影がある。彼は自分の醜い姿を水鏡に映して見て、抑へ難い歡喜を感じるらしい。彼はその歡喜を衆人の前に誇示して、Faun らしく無恥に有頂天に踊り廻るのである。私たちに嘔吐を催はさせるものも、彼には Ekstase を起す。私たちが赤面する場合に彼は哄笑する。彼は無恥を焦點とする現實主義者である。(私も一度はそれであつた。暫らくの間はその中で快活に踊ることも出来た。しかしその間に心の眼は根元の醜さを見た。私は一度振りほどいた繩目の貴さを漸く悟つて、再び自ら縛についた。私の羞か

しさは無垢の羞かしさではなくて、懺悔の羞かしさである。——Iには賣女を思はせるものがある。おしろいの塗り方も髪結び振りも着物の着こなしも總て隙がない。delicateな印象を與へ清い美しさで人を魅しやうとする注意も行き亘つてゐる。しかもそこに總てを裏切る或物の閃きがある。人は密室で本性を現はす無恥な女豚を感じないではゐられない。——Kは生ぬるいメフィストを聯想させた。彼は自己の醜さを嘲笑する。しかし醜さを焼き滅ぼさうとする熱欲があるからではない。彼は他人の弱所を突いて喜ぶ。しかし惡を憎む道德的痼癩からではない。

——こゝまで考へて來ると、ふと私は一つの危險を感じ出した。彼らの現はす傾向に就ては、たとへ全然捨離し得たと云へないまでも、最早自分に危險はあるまい。しかしこの敵と戦つてゐる間に、他の敵が背後へ廻つてゐた。私はそれを味方と信じてゐたが、しかしその味方のために足をさらはれることがないとは云へない。

それは私の内のメフィストである。私は自分に淨化の熱欲と道德的痼癩とがある故を

以て、自分のメフィストを跳躍させて好いものだらうか。それは自己と同胞とに對する愛の理想を傷けはしないだらうか。私は彼らの弱所を氣の済むまで解剖した所で、どれだけ自分の愛を進め得たらうか。怒は怒を煽る。嘲笑は嘲笑を誘ふ。メフィストも亦メフィストを誘ひ出すだらう。

私はまた事を誤まつたのだらうか。

七

私は人の長所を見たいと思つてゐる。さうしてなるべく多くの人に愛を感じたいと思つてゐる。しかし私には思ふほどにそれが出來ない。

私が愛を感じてゐる人の短所は、同情を以て見ることが出来る。時にはその短所の故に成長が早められてゐるとさへも思ふ。しかし愛を感じない人の短所は、多くの場合致命的に見える。私はごもすればさういふ人の長所や苦しみや努力を見脱して丁ふ。さうしてその際、自欺の衣を剥ぎ偽善の面をもく様な、思ひ切つた皮肉の矢を痛

がる所へ射込む、と云ふことに、知らず／＼興味を感じてゐないとは云へない。

私は曾てこの様な興味に強く支配されてゐたこともあつた。その頃は凡ての事物に醜い裏が見えて仕方がなかつた。多くの人の言動には卑しい動機が見えすいて感じられた。風習と道徳には虚偽が匂つた。私はそれを嘲笑せずにはゐられない氣持であつた。さうして自分の態度の輕薄には氣附かなかつた。

これに氣付いたのは私には一つの契機であつた。私は自分の過去を恥ぢ、呪ひ、さうして捨てた。出来るならば私はそれまでに書いたものを總て人の記憶から消し去りたいと希つた。もう筆を取る勇氣もなかつた。私はその時に自己表現の情熱を中斷されたやうに思ふ。その頃は知人と口をきくことさへも私を不安にした。私は出来るだけ知人を避け、沈黙を守つた。愛と誠實とに動かされない場合は何事も云はず何事も書くまいと誓つた。

かうして一年以上私は狭い自分の周圍以外に眼と口を向けなかつた。その間に私は

自分を鑄直すことが出来たつもりであつた。

しかしメフィストはなほ自分の内に生きてゐる。彼の根柢は意外に深い。事毎に彼はビョイビョイ飛び出して来る。さうしてその瞬間に私は彼を喝采する心持になつてゐる。たとへ直ぐそのあとでそれを後悔するとしても。

私は二三日前に一人の女の不誠實と虚偽と淺薄と脆弱と浮誇とが露骨に現はされてゐるのを見た。しかし私は、興奮して鼻の先を赤くしてゐる彼女の前に立つた時、憐愍と齒がゆさのみを感じてゐた。性格の弱さと浮誇の心が彼女を無恥にし無道徳にしてゐる。彼女の意志を強め、彼女に自信を獲得させることが、やがて彼女を救ふことになるだらう。より強い力を内より湧き出させるのが、自欺を破つてやる最良の方法であるのだから。かうして私は彼女を優しく勞はることが出来た。——一時間経つた。私は何時の間にかメフィストであつた。女の心の隅々から虚偽と惡徳とを掘り出し、それを容赦のない解剖刀で切り開いて見せる。私は熱して、力を集注して、それ

をやつてゐた。傷いた女の誇り心の反撥が私を益々刺戟した。女が最後の武器として無感動を装ふのを、更に摘發し覆さなければ止まないほど私は残酷であつた。——さうして結果はどうなるのか。女はますます無恥であるやうに努力するだらう。私にはたゞ後悔が残つた。

他人の製作に對する私の心持にも同じやうなものがないとは云へない。例へば私は四五日前に大家と稱せらるゝ或人の感想を讀んでその人の製作を考へて見た。彼は「事實」に即するつもりである。又實際「事實」を持つてゐる。しかしそれは浅い生ぬるい事實に過ぎなかつた。けれども彼はもつと深い事實を示す多くの思想や言葉を知つてゐる。彼はそれを自分の浅い事實に引きつけて考へる事によつて、外形的に自分をそれらの思想の高さまで高めて行つた。その結果として彼は自分の知らない事を描きまた論じてゐる。彼は深い語を軽々しく使ふ。浅い事實を深さうに表現する。問題の入口に停まつてゐながら問題を解決したつもりになつてゐる。彼は身の程を知らないの

である。彼は虚偽を排する主義を奉じてゐるが、それを徹底させるためにも浅い體驗はたゞ浅い儘に表現すべきであつた。一切の借物を捨て、自分の直視にのみ即して考へて見るべきであつた。——かう考へてゐる内に、彼の感想の内から二つの語が自分の批評の證明として心に浮んだ。彼は「徹底」に就て語りながら云ふ、徹底を云ふ人が案外に徹底してゐない、云はぬ人に反つて徹底したのがある。これは事實である。問題にならないほど解り切つた事實である。しかも彼はこの語で徹底を説くものを論破したつもりになつてゐる。これによつても彼が曾て「徹底」を問題としなかつた事は明らかである。何故なら彼の態度には、徹底を要求する者の苦しみと努力とに對するかの同情も同感も現はれてゐないからである。徹底し切れない所に徹底を要求する種々な心持がある。それを見得ない人にどうして「徹底」を論ずる権利があるかは自らを「徹底した人」に擬してゐるかも知れないが、そのやうな徹底は意識しない無知な妥協の安逸か、或は物の見方や扱方の凝固に過ぎない。

彼はまた所有の欲望を嘲つて、自分の家庭の経験より見ても所有は不
 これがまた彼に所有の要求のないことを、従つて所有の要求を解し得な
 てゐる。眞に所有の要求に燃えてゐる者に、(或は燃えてゐた所に)どうして
 可能だと云ひ切れるだらう。自分にそれ程の力がない、(或はなかつた)と啞く心
 はなることもあるが、しかしそれは自己を嘲る根據にはなつても、他人の嘲る根據
 はなり得ない。正しく彼は自分の浅い生温い経験から押して、自分の知らない世界の
 ことを横柄に批評したのである。……

かう云ふ論證は私を好い氣持にした。私は彼と彼の一味との淺薄な醜さを快げに見
 下した。さうして彼の永い間の努力と苦心と功績とを一切看過した。私はそこに自分
 の愛の狭さを感じる。この種の心持が屢々他人の製作に對して起つてゐるのではない
 かと、自分を憂へないではゐられない。愛なき批評を呪ふやうになつた私には、もは
 や氣輕に他人を批難する度胸がなくなつた。

八

シヨオとドストイェフスキとに一種の類似がある。それは知的と心理的とに特色を
 有する表現法が因をなしてゐるかも知れない。しかし私は特に彼らの内からメフィス
 トが首を出してゐる所にそれを認めたい。さうしてまたそこに彼らの大きい相違をも
 認めたい。

シヨオが社會に對して浴びせかける辛辣な皮肉の裏には、彼の理想の情熱と公憤とが
 燃え上つてゐる。しかし彼の製作にはしんみりした所がまるでない。彼は愛の溢れた
 人間をも、道に苦しむ人間をも、描くことが出来ない。畢竟、彼は人類の姿を描き出
 すことが出来ない。彼には惡を憎む心のみあつて憐愍がない。この關係を彼のメフィ
 ストが示してゐる。彼のメフィストは否定の矢をたゞ偽善者の上に——臭いものを覆
 ふた蓋の上に——のみ向けるのである。彼は破壊を喜ぶが、しかし眞に善きもの美し
 きものを破壊しやうとはしない。云はゞ正義の騎士に商賣換をしたメフィストである。

従つてこのメフィストはファウストを持つてゐないのである。さうしてまた、シヨオ自身の内にも、ファウストは全然ゐないらしい。彼は善の塊のやうに、自己を築き了つた人のやうに、安固として動かない。彼は自己鍛錬の苦しい道を経ないで、社會救済の自信と力とを得た人のやうに見える。彼はその理想の情熱と公憤との権利を以て、何の遲疑する所もなく、大膽に滿腹の嘲罵を社會の偽善と不徹底との上に注ぐのである。

しかしドストイェフスキイのメフィストは常にファウストに添つて現はれて来る。眞の生を求めて泣き、苦しみ、恐れ、絶望する「人間」の傍にのみ、メフィストはその意義を持つ。彼は社會の悪と人間の愚とを罵るが、しかしそれは社會を救済する爲めではなくて、ファウストを誘惑しファウストから「人間」に對する愛と信頼とを奪ふためである。道を求むる人は必ず一度はこの試みに逢はねばならない。ファウストはこの誘惑を切り抜けて、社會と人間とを愛し続ける。さうしてドストイェフスキイは、この愛を以

て人間を救済しやうとするのである。彼の描くのは「個人」とその歩んで行く「道」とである。彼の努力の焦點は自己の永遠の生を築くことである。それはたゞ愛によつてのみなされる。さうしてそこに人類の救済がある。彼は悪を罵つてゐるのみには堪へられない。悪の故に人間を憐み、自ら苦しむ。大きい愛、宗教的な愛……

——ここにこそ自分の行くべき道があつた。私は自分の内にメフィストが住むのもまた無意義でなかつたと思ふ。メフィストがゐなければ私の世界も寂しいだらう。メフィストは私の世界を押し廣め、多くの心理や見方を教へて呉れる。それを機縁として私のファウストが眞の叡智を得て行くのである。……メフィストを跳梁させてはいけな。しかしメフィストの故に苦しむのは好いことだ。メフィストがあまりに早く離れ去らなかつたことは、喜ばなくてはいけないだらう。メフィストの居ることも私には好い刺戟になる。シヨオのメフィストのやうにならない限りは。

シヨオを離れることの出來たのも私には一つの轉向であつた。

二 生きることを作ること

私は近頃、「やつと解つた」といふ心持にしばしば襲はれる。対象は大抵これ迄知り抜いたつもりでゐた古馴染のことに過ぎない。しかしそれが突然新しい姿になつて、活々と私に迫つて来る。私は時にいくらかの誇張を以て、絶望的な眼を過去に投げ、一體これ迄に自分は何を知つてゐたのだとさへ思ふ。

例へば私は *affectation* の厭なことを昔から感じてゐる。その點では自他の作物に對してかなり神経質であつた。特に自分の行爲や感情に就いてはその警戒を怠らないつもりであつた。然るに或日突然私は眼が開いた氣持になる。そして自分の人間と作物との内に多分の醜い *affectation* を認める。私はこれまで何故それに氣が附かなかつたかを自分ながら不思議に、また腹立たしく思ふ。*affectation* が何であるか、それがどう

云ふ悪い根から生ひ出でて来るか、それはまるきり解つてゐなかつたのである。何といふ馬鹿だ、と私は思はないではゐられない。

「さう云ふ時には自分の悪いことばかりが眼につく。自分の理解を疑ふ心が激しく沸き立つ。「人生を見る眼が鈍く浅い。安價な自覺で好い心持になつてゐる。自分で自分を甘やかすのだ。」かう自分で自分を罵る。そして自分の人格の惨めさに息の詰まる様な痛みを感じる。」

しかしやがて理解の一步深くなつた喜びが痛みのなかゝら生れて来る。私は希望に充ちた心持で、人生の前に——特に偉人の内生の前に——もつと謙遜でなくてはならないと思ふ。そして底力のある勇氣の徐々に蘇つて来ることを意識する。

二

たゞ「知る」だけでは何にもならない、眞に知ることが、體得することが、重大なのだ。——これは古い言葉である。しかし私は時々今更らしくその心持を経験する。

——誰でも自分自身のことは最も好く知つてゐる。そして最も知らないのはやはり自己である。「汝自身を知れ」と云ふ古い語も、私には依然として新しい刺戟を絶たない。

思索によつてのみ自己を捕へやうとする時には、自己は霧の様に掴み所がない。しかし私は愛と創造と格闘と痛苦との内に——行爲の内に自己を捕へ得る。そして時には、思はず顔を背けやうとする程ひどく参らされる。私はそれを自己と認めたくない衝動にさへ驅られる。しかし私は絶望する心を鞭つて自己を正視する。悲しみのなかから勇ましい心持が湧いて出るまで。私の愛は戀人が醜い故に益々募るのである。

私は絶えずチク／＼私の心を刺す執拗な腹の蟲を斷然押へつけて了ふつもりで、近頃或製作に従事した。静かな歡喜がかなり永い間續いた。その故に私は幸福であつた。或日私は可愛い私の作物を抱いてトルストイとストリンドベルヒの前に立つた。見よ。その鏡には何が映つたか。それが果して自分なのか。私は忽ち暗い谷へ突き落

された。

私は自分の製作活動に於て自分の貧弱をまざ／＼と見たのである。製作その者も、そこに現はれた生活も、かの偉人たちの前に存在し得るだけの權威さへ持つてゐなかつた。私は眩暈を感じた。しかし私は踏み留まつた。再び眼が見え出した時には、私は生きることゝ作ることゝの意義が「やつと解つた」と思つた。私は自分を愧ぢた。と共に新しい勇氣が底力強く湧き上つて來た。

親しい友人から受けた忌憚なき非難は、反つて私の心を落ちつかせた。烈しい苦しみと心細さとのなかではあつたが、自分にとつての恐ろしい眞實をたじろがすに見得た經驗は私を一步高い所へ連れて行つた。私は黒い鐵の扉に突き當つたが、自分の力で動かし難い事を悟ると共に、鍵穴を探し出す餘裕を取返したのである。

三

トルストイやストリンドベルヒの作物を読んで見る。語の端々までも峻嚴な藝術的良

心が行き亘つてゐる。はち切れるやうな力が語の下から覗いてゐる。短い描寫が驚くべき豊富な人生を示唆する。

所で自分はどうであらう。強調すべき點は氣が済むまでも詳しく書かうとする。そのために空虚な語のはいつて來ることには氣附かない。従つて多くを示唆する少ない語の代りに、少くを説明しやうとする多くの語がある。しかも熱に浮かされた自分にはその空虚が充溢に見えるのである。

大業に仕過ぎるといふことは若い者にあり勝ちの缺點かも知れない。重大事を重大事として扱ふのに不思議はないと思ふから。しかし引きしめて控え目に、たと核實の目を絞り出す事は、嘘を書かないための必須な條件であつた。製作者自身は眞實を書いてゐるつもりでも、興奮に足をさらはれて手綱の取り方を忽にすれば、書かれた物の内からは必ず虚偽が響き出る。大業にすることは即ち致命傷であつた。

私はこの點に自己を警戒すべき重大事を認めた。如何に苦しんでも苦しみ足りる

といふ事のないこの人生を、私はともすれば調子づいて軽々しく通つて行く、そしてその凝視の不足は直ちに表現の力弱さとして私に報いて來るのである。私はもつと確かりと大地を踏みしめて、あくまで浮かされることを恐れなくてはいけない。生活態度の眞實はやがて製作態度をも眞實にするだらう。製作態度の眞實はやがて表現の簡素と充實をもたらすだらう。

「私は藝術的良心が生活態度の誠實でない人の心に榮えるとは思はない。」

四

佛蘭西や伊太利の作家には饒舌が眼につく。私はダモンデオやブルヂエの冗漫に堪へ切れない。トルストイに至つてはさすがに偉大である。例へばあの大部なアンナ・カレニナのどの頁を取つて見ても、私は極度に緊縮と充實とを感じるのである。

ドストイェフスキを冗漫だとする批評はかなり古くからあるが、私は冗漫を感じない。内容がはち切つてゐるから。——尤も技巧から云へばかなりに隙がある。夏目先

生はカラマヅフ兄弟の或點をディクンスに比して非難された。その時私は承服し兼ねたが、しかし考へて見ると私はディクンスの本體を知らない。それにドストイェフスキには浪漫派らしい弱點がある。恐らく夏目先生の非難は當つてゐるのだらう。

けれどもドストイェフスキの偉大な内生活は表現の上の缺點を消して了ふ。カラマヅフ兄弟は我々の新らしい聖書である。そこには「人間」の心が隅から隅まで書き現はされてゐる。そして生の渦卷の内から一道の光明を我々に投げ掛ける。

ストリンドベルヒに至つては、その深さと鋭さに於て——簡素と充實とに於て近代に比肩し得るものがない。また心理と自然と社會との觀察者としても、露西亞の巨人の壘を廢する。彼も亦「人間」の運命を描いた。そして我々に新らしいファウストを與へた。

私は近頃彼の「赤い室」をゾラの「巴里」と比較して見た。彼がゾラの影響の下にその處女作を書いたことは疑ひがない。しかし驚くべき事は三十歳の青年が自然主義の初

期に既にゾラを追ひ越しモウバツサンの先を歩いてゐたことである。題目とねらひ所は兩者殆んど同じで、構圖さへも似通つてゐるが、ゾラの百頁を費す所は彼の筆によれば僅かに二三十頁で済む。しかも描寫が具體的で事實に迫つてゐる點では、ゾラは遙かにかなはない。ゾラには強く作爲の匂ひがする。そして心理が淺く且足りない。その上かなり冗慢である。ストリンドベルヒはこれに反して社會の斷層を描くの自傳的の匂ひを以て貫ぬいてゐる。心理は鋭く、描寫はカリカチュアに近い程鮮かである。しかも彼の心理觀察の周密は常に描寫のカリカチュアに墮するのを救ふ。従つて彼の描寫は簡素の限度だと云ふ事も出来る。

ストリンドベルヒの頭は恐ろしく好い。ゾラの頭は極めて平凡である。

五

告白の欲望はともすれば直ちに製作衝動と間違へられる。素より體驗の告白を地盤としない製作は無意義であるが、しかし告白は直ちに製作ではない。告白として露骨

であることが製作の高い價値を定めると思つてはいけない。けれどもまた告白が不純である所には藝術の眞實は榮えない。私の苦しむのは眞に嘘をまじえない告白の困難である。この困難に打ち克つた時には人はかなり鋭い心理家になつてゐるだらう。今の私はなほ自欺と自己辯護との痕跡を、充分消し去ることが出来ない。自己辯護はともすれば浮誇にさへも流れる。それ故私は苦しむ。眞實を愛するが故に私は苦しむ。

六

私は自分に聞く。——お前にどんな天分があるか。お前の自信が蟲の好い自惚れでない證據は何處にあるのだ。

そこで私は考へる。——私には物に喰ひ入るかなりに鋭い眼がある。一つの人格、一つの世相、一つの戦、その秘められた核を私は一本の針で突き刺して見せる。その證據は私の製作が示すだらう。

そして私は製作する。出來たものを例へばストリンデルヒの作に比べて見る。何

といふ鈍さと貧弱さだらう。私は羞耻と絶望とで首を垂れる。

微妙な線、こまやかな濃淡、魔力ある抑揚、秘めやかな諧調、さう云ふ技巧に於ても亦、私の生れつきの自惚は製作によつて裏切られる。要するに私は要求と現實とを混同する夢想家に過ぎなかつた。

かうして私は自分の才能に失望してかなり苦しむ。しかし私は思ふ。私の問題は與へられた物が何であるかに——私の *Misère* にあるのではなかつた。私はたゞ與へられた物を愛し育てるために生きてゐるのであつた。私はたゞ自分の愛の力の弱らない様に、また與へられた物の發育の止まらない様に心配してゐれば好い。私の苦しみと愛とで恐らく私の生活の價値は徐々に築かれて行くだらう。

運命を愛せよ。與へられた物を呪ふな。生は開展の努力である。生の重點はこの努力にあつて、與へられた物にあるのではない。呪咀は生を傷ひ、愛は生を高める。ただ愛せよ、そして凡てを最も好く生かせよ。——かうして私は喜悅と勇氣とに充たさ

れる。天分の疑懼は暫くの間私の心を苦しめなくなる。

天才はその悲痛な運命の愛によつてのみ非凡であつた。彼らは多くを與へられた事よりも、寧ろ多くを最も好く生かした事に於て偉大であつた。私はその驚嘆すべき誠實の故にのみ彼らの前に跪く。

そして私は自分に聞く。——お前は誠實か。お前の努力は最大限まで行つてゐるか。それが自欺でない證據は何處にあるのだ。

七

人生は戰である。そして戰の大小深淺がまた人間の價値を左右する。

戰ひの態度の純一は、複雑な内生によりも、單純な迷ひのない生活に遙かに起り易い。それ故唯純一の故に意を安めてはいけない。純一の態度に固執する者はともすれば内容を空疎にする。

私は或冬の日、紺青鮮かな海の邊に立つた。帆を張つた二三十艘の小舟が群をなし

て沖から歸つて来る。そして鳩が地へ舞ひ下りる様に、徐々に、一艘づゝ帆を下して半町程の沖合に屯した。岸との間には大きい白い磯波が巻き返してゐる。何時の間にか薄穢ない老人と子供とが岸邊に群がり立つた。やがて、體の好い若者の揃つた舟が最初に突き進んで来る。磯波は烈しく押し戻す。綱が投げられる。若者が波の間へ飛び込んで行く。舟は木の葉のやうに揉まれてゐる。若者は舟の傍木へ肩を掛ける。陸からは綱を引くものが諸聲に力のリズムを響かせる。かくて波を蹴散らし、足を揃へ、聲を合せて舟を砂の上に引すり上げて行く。

一艘上がると共に、舟にゐた若者たちは直ちに綱を取つて海に向つた。次の一艘が磯波に乗り掛ると、丁度綱を荒れ廻る鹿の角に投げ掛ける様に、若者は舟へ綱を投げる。そして他の若者たちは躍り掛つて、肩をあてゝ一氣に舟を引き上げる。かうして次から次へと數十艘の舟が陸へ上げられるのである。陸上の人数は益々殖える。舟は益々面白さうに上つて来る。老人と子供と女房たちは綱に捕まつて快活に跳ねてゐる。

誰が命令すると云ふでもないのに、一團の人々は有機體のやうに完全に協力と分業とで仕事を實現して行く。

私は息を詰めてこの光景を見まもつた。海の方と戦ふ人間の姿。……集中と純一とが最も具體的な形に現はれてゐる。……力の充實……隙間のない活動。——一人の少年が両手を高く舉げて波のなかに躍り込んで行く。首だけ出して、波にさらはれた板切に追ひ縋る。やがて板切を抱いて水を跳ね飛ばしながら駆け上つて来る。——生が踊り跳ねてゐる。生が自然と戦ひそれを征服してゐる。

私はそこに現はれた集中と純一と全存在的な活動との故に暫し恍惚とした。

この氣持の好さは我々が凡ての活動に追ひ求めて居る所の一種の法悦であつた。我々の内にも亦、生の焰はかく燃え上らなくてはいけない。まことにそれは生本來の姿であり、また生本來の歡喜である。

かうして漁師の群の活動を眺めてゐる内に私はふと傍觀者の手持無沙汰を感じ出し

た。私は漁師の群に投じて共に働くか、でなければ傍觀者としての自己の立場を是認するか、いづれかに道を極めなければならなくなつた。そして私の頭には百姓と共に枯草を刈るトルストイの面影と、地獄の扉を見下して坐すべきあの「考へる人」の姿とが、相並んで浮び出た。私は石の上に腰をおろして、左の脇を右の膝に突いて、顎を手の甲にのせて、——そして考へに沈んだ。残つた舟はもう二三艘になつてゐた。

私は思つた。漁師の群に貴い集中と純一とを認めたのは私の心に過ぎなかつたではないか。彼らが濱から家へ歸る。そこにはもう貴さはない。彼らは波と戦つて勇ましく打ち克つ。しかし敵手が人間になり、更に自分の心になると、彼らはもう立派な戰士ではない。彼らの活動は眞生の面影を暗示する。しかしそれは彼ら自身の生活ではなかつた。彼らは低い力と戦つてゐる時にのみ強いのであつた。

私は複雑な、深さの知れぬ人生の色々な力を思つた。そして集中と純一との缺けてゐる惨めな醜さを心に浮べた。そこにある苦しい戦ひは、裸になつて冬の海に飛び込

むことによつては、解決されさうにもなかつた。私はたゞ自分の遣り方で、自分の内
生に、あの集中と純一を獲得する外はない。そのためには私の凡ての戦を終局まで
戦はなくてはならぬ。勝利を得るまでの分裂した生活の惨めさは、目下の自分の力で
は如何ともし難い。

私は一つのことを悟り得た。迷ひと屈托とに遅滞してゐる故を以て、直ちにその人
の人格を卑しめてはいけない。態度の純一の故に、直ちにその人の人格を過大視して
はいけない。態度の美しさの外に、なほ一つ、戦の深さによつて人を見る視點がある
からである。

八

私は誤解を恐れる。そしてその恐れを愧ぢる。私はその恐れに打ち克たなくてはな
らない。

もとより誤解は不愉快である。出来るならばそれを解きたいと思ふ。たゞ言葉の間
らない。
違ひや事件の行違ひの他に根のない誤解ならば、解くこともまた易い。
しかし私は、人格の相違が誤解を必然ならしめる場合を少なからず経験する。それ
を解き得るものはたゞ大きい力と愛とである。私はその爲には未だあまりに弱い。私
のなすべきことは、誤解を氣にしないで唯力と愛とを強め育てる處にのみあるのだつ
た。

相手の人格が頑固野卑である場合には、誤解を解くことは益々難かしい。耶蘇でさ
へそれを解き得なかつた。

私は群集の誤解を恐れてはならない。そして誤解を解くための焦燥などは絶対にし
てはいけない。容易く群集に理解されることは危険である。群集の喝采は必ずしも作
者の勝利を示しはしない。虚偽と阿諛に充ちた作品をさへ喜ぶ人々の喝采は、恐らく
不愉快なものだらうと思ふ。

萬人の胸を潤す物を作ることは我々の理想である。我々は端的に「人間」の心に迫つ

て行かなくてはならぬ。しかし未だ力に乏しい私の眼には、それが殆んど不可能に見える。深いものを見得るのはたゞ少數の人々に過ぎない。大多數の人々を共通に動かし得る物は、今の處、センチメンタリズムの他にないだらう。

誤解を恐れるな。たゞ眞實の道を歩め。

九

怒を以て怒を鎮める事は出来ない。主我心を以て主我心を碎く事も出来ない。それをなし得るのは唯愛のみである。

怒は怒を煽り、主我心は主我心を高める。もし他人の怒と主我心を呪ふならば、先づ自己の内の怒と主我心とを征服せよ。まことの愛はその時初めて湧き出るだらう。

一〇

私は彼を愛し、尊敬し、恐れ、憐み、そして侮蔑する。

私は愛する者、尊敬する者、恐れる者、憐む者、侮蔑する者を持つてゐる。また愛

し尊敬する者、愛し憐む者、憐み侮蔑する者を持つてゐる。尊敬し恐れる者、恐れ侮蔑するものもないではない。私はこれら對人感情を唯一つの大きい愛に高めやうと努力する。そのために絶えず自責の苦しみがある。複雑に結びついた感情ほど不安を起す程度が甚だしい。

しかしこれらの感情の凡てが一個人に集まるのは、唯彼に對してのみである。それ故に彼は何人よりも激しく私を不安ならしめる。私は一人でゐて彼の名を思ひ浮べただけでも、もういら／＼し初める。そしてそのいら／＼する事が自分ながら癩に障る。彼に對する私の態度は純一の正反である。それが恰も、彼に打ち碎かれた様な感じをさへ私の内に起させる。私は彼の前に跪くことは出来ない。そのくせ跪かうとしてゐる者の様にうろ／＼してゐる。

私は彼よりもつと愛し、もつと尊敬する人を持つてゐる。私の生活に喰ひ入つてゐる點から言へば、彼と私との間には左程深い關係はない。しかし彼は最も辛辣に私

の注意を刺戟する。従つて私の意識を占領する度数が非常に多い。彼の特質がこの刺戟性がないとは云ひ切れまい。

彼の現在は未知數である。彼が私の注意を引くのは價值が高い故でなくて價值が未だ現はれないからである。彼は確實性の代りに不安定を以て、力の代りに豫感を以て、形の代りに影を以て、思想の代りに情調を以て、何者かをほめかす。彼は實を以て人に迫らずに虚を以て人を釣るのである。彼が偉いか偉くないか、私は知らない。

私は彼に惱まされることを愧ぢる。しかしその刺戟の故に彼に感謝する。

一一

私はかう云ふ事を夢みてゐる。——私は自分の體驗から、私のファウストを書かねばならぬ、と。この夢想の情熱は、解らないなりにファウストを讀んだ少年の時から年と共に、經驗と共に、高まつて行く。

もとよりそこには、ファウストを書き得た偉大な人格のやうに、高く全く自己を棄

き上げやうとする慾動がひそんでゐる。そしてその慾動の故に自己を悲觀し自己を鞭つ。

私の考へでは、私の夢想するファウストは私の愛がゾシマの様に深くならなくてはとても書けさうにない。今の私の愛は愛と呼ぶにはあまりに弱い。私はまだ愛するもの、罪を完全には許し得ないのである。愛するもの、運命を悉く擔つてやることも出来ないものである。それ處ではない。迷ふ者を憐み、怒るものを勢はることもすらもなし得ない。力の不足は愛の不足であつた。我を張るのは自己を殺すことであつた。自己を愛に於て完全に生かせる爲には、私はまだく愛の悩み主我心の苦しみを——愛し得ざる悲しみを——感じてゐなくてはならない。

しかし私はこの愛の理想の故に一つの「人間」の姿を描きたいと思ふ。主我心の蛇に喉を噛まれながら、遙かなる蒼空を見上げてゐる「人間」の姿を。

それは實に人類の運命であつた。人は誠實に生きる限り——生を避けて、生きなが

ら死んだものにならない限り——才なき者は才なき儘に、弱き者は弱き儘に、人類の運命を象徴するのである。

それ故私は、現在の自分も亦小さい一つのファウストを描く権利を持ちたい。私は體驗の渦巻のなかにゐる。そこに一つの *Leitmotiv* が現はれる。そして磁石の様に砂のなかから唯鐵のみを吸ひ上げる。それは殆んど本能的である。かくして作られたる體驗の體系は、一つの新しい生として創造の名に價する。

唯しかし、その體驗が淺薄な故に偽りを含んでゐるとしたら——

三 ベエトオフエンの面

一

人生が苦患の谷であることを私も亦しみぐと感ずる。しかし私はそれによつて生きる勇氣を消されはしない。苦患のなかからのみ、眞の幸福と歡喜は生れ出る。

或人は云ふだらう。歡喜を産む苦患は眞の苦患でない。苦患の形をした歡喜は眞の歡喜でない。お前は苦患をも歡喜をも知らないのだ。お前の體驗はそれ程に稀薄だ。

しかし私は答へる。歡喜を産む可能性のない苦患は「生きてゐる人」にはあり得ない。苦患の色を帯びない歡喜は「生に觸れない人」にのみあり得る。そのやうな苦患と歡喜とは、息をしてゐる死人や腐つた頽廢者などの特權だ。

苦患は戰の徵候である。歡喜は勝利の凱歌である。生は不斷の戰である故に苦患と嬉しむることが出来ない。勝利は戰つて獲られるべき貴い瞬間である故に必ず苦患を豫

想する。我らは生きるために苦患を當然の運命として愛しなければならぬ。そして電光のやうに時折苦患を中斷する歡喜の瞬間をば、成長の一里塚として全力を以て掴まねばならぬ。

苦患の故に生を呪ふものは滅べ。生きるために苦患を呪ふものは腐れ。

二

シヨベンハウエルの哲學は苦患の生より生ひ出る絶妙な歡喜への讚歌であつた。

生を謳歌するニイチエの哲學は苦患を愛する事を教ふる故に尊貴である。

苦患を乗り越えて行かうとする勇氣。苦患に焰を煽られる理想の炬火。それのない所に生は榮えないだらう。

三

私は痛苦と忍従を思ふ毎に、年少の頃より眼の底に烙きついてゐるストゥツクのベエトオフエンの面を思ひ出す。暗く閉ぢた二つの眼の間の深い皺。喰ひしばつた唇を

取り巻く莊嚴な筋肉の波。それは人類の悩みを一身に擔ひおほせた悲痛な顔である。そして額の上には永遠に凋むことのない月桂樹の冠が誇らしくこびりついてゐる。

この顔こそは我らの生の理想である。

四

苦患を堪へ忍べ。

苦患に堪へる態度は一つしかない。そしてそれをベエトオフエンの面が暗示する。苦患に打向ふて、苦患と取組んで、沈黙、靜寂、悲痛の内に、苦患の最後の一滴まで嘗め盡す。この態度のみが耐忍の名に價するだらう。

苦患に背を向け、感傷的に慟哭し、饒舌に告白する。かくしても亦苦患の終りを經驗することは出来る。しかしそれを眞に苦しみに堪へたと呼ぶことは出来ない。

卑近の例を病氣に取つて見やう。病苦は病の癒えるまで、或は病が生命を滅ぼすまで續く。言を換へて云へば、病苦は續く間だけ續く。病氣に罹つた以上は誰でも最後

まで苦しみ通すのである。耐忍するもしないもない。しかも我々は病苦に堪へ得る人と堪へ得ぬ人とを區別する。同じ病苦を受けるにもそれ程異つた二つの態度があるからである。

「然り」と「否」と。受ける態度と逃げる態度と。生きる人と死ぬ人と。これが先づ人間の尊卑をきめるだらう。

五

生の苦患に對する態度に就ては、それが道徳的に大きい意義を持つてば持つ程、より大きい危険がある。

病苦は號泣や哀訴によつて誤魔化すことは出来ても、全然逃避し得る性質のものではない。しかし精神的な生の悩みは、露出させる事によつて誤魔化し得る他に、また全然逃避することも出来るのである。

或る内的必然によつて意志を緊張させた場合を想像する。喩へて云へば、或る理想

の爲に重い石を両手で捧げるのである。腕が疲れる。苦しくなる。理想の焔に焼かれてゐる者は、腕がしびれても、眼が眩んでも、齒を喰ひしばつてその石を捧げ続ける。彼の心は、神の手がその石を受取つて呉れる瞬間のために喘いでゐる。しかしこれと異なつた態度の人は、腕が疲れて來るに従つて、石を大地に投げ捨てた時の安樂と愉快を思ふ。そして自分に囁く。「こんな石を捧げてゐるのは馬鹿々々しいではないか。これを投げ捨てれば俺の生は自由に輕快になるだらう。そこに眞の生活があるのだ。」かう云ふ自己是認が出来ると共に、石が地に落ちる。彼は苦患を脱する。

かうして或種の人々は生から逃げ出して行く。そして漸次に息をしながら死んで行く。何物も人格に痕を残さない。人格は一步も成長しない。腐敗が何時の間にか核實しまで及んでゐる。

六

製作の苦しきは直ちに生の苦しみであるとは云へない。製作の苦しみが人格の苦し

みに根を持つ時、初めて貴むべき苦しみになるのである。

生活と製作とは一つでなければならぬ。これは自明のことである。しかしそれは戀をしながら同時に戀物語を書いて行くといふ意味ではない。製作は花、生活は根である。一つの生に貫かれてはゐるが、産む者と産まる、者との相違はある。偉大な花は深く張つた根からでなくては産れない。

眞に價値ある苦しみはたゞ根にのみ關する。大きい根から美しい花の咲かないことはあつても枯れかゝつた根から美しい花の咲くことは決してあり得ない。根の枯れるのを閉却して、唯花のみ咲かせやうとあせる人ほど、馬鹿げた哀れなものはないだらう。

しかしその哀れな人々が、大きい顔をして、さも生きがひありさうに働いてゐる。

七

お前の生を最も好く生きるために、

お前の苦しみを底まで深く苦しめ。

生が愛であることを、

愛が苦しみであることを、

苦しみが愛を煽ることを、

愛が生を高めることを、

お前のその顔に刻みつけろ。

四 放蕩息子の歸宅

放蕩息子よ。傷いた獸のやうに狂ひながら父の許に歸つた放蕩息子よ。

醉歡に疲れて霞すんだお前の眼には、慈愛の溢れた父の瞳の輝きが見えないのか。お前の歸宅を喜んで涙ぐんでゐる優しい同胞の顔が見えないのか。たとへお前の悔恨が根の浅い一時の氣分に過ぎなからうとも、たゞお前の姿をこゝに見るだけでお前を愛する人々の心は波うつ。嘲笑に對して過敏になつてゐるお前の胸を、この素朴な愛で暖めよ。さうして愛のまことをその儘に受け容れる無邪氣な心に歸つて呉れ。

私はお前の泣く言葉を聞いた。お前の浮氣な心が今脱けて來た生活への未練で一杯になつてゐることも承知してゐる。實際こゝで忽然生れ更つて謙遜な父の僕になれる程、お前の生活は熟してはゐないのだ。併し我々の内の誰がそのやうな光榮に充ちた成熟を恵まれてゐるだらう。私の眼の届く限りでは、我々の同胞は皆まだ花である。

花の落ちたばかりの小さい青い木の實である。お前ばかりが幼稚なのではない。お前の道連れは多いのだ。お前の心が迷ひに充ちてゐるからと云つて、お前だけを責めやうとは思はない。

併し、まだソワ／＼したお前の心持をジツクリと落ちつけて、同じ惱みに惱んでゐる私の言葉を聞いてくれ。私はたゞ感傷的に涙を流すのではない。かうしてまたしみじみお前に口を聞けるやうになつた事が、何故ともなく嬉しくて、感謝の心持で胸が一杯になつて來たのだ。惱の多い兄弟よ、もつと話を進める前に、この烈しい風の音のなかで、靜かに／＼祈らうではないか。

私はお前が大きい愛情を求めてゐる人間である事を昔から知つてゐた。その愛情の充たされない不安な焦燥が、お前のなかのドン・ホアンを嗾かけて、お前をまるで餓ゑた犬のやうに女の肌から肌へと嗅ぎ廻らせた事も知つてゐる。今お前が自分の過去を悔いながらなほその過去に引かれてゐる機會を捕へて、私は自分の感じてゐたこと

をすつかり云つて了はふと思ふ。私の言葉はお前の急所を刺すことになるかも知れない。しかしそれはお前を殺すためではなくお前を活かすためなのだ。私の愛を疑つてはいけない。

私はお前にハッキリと云ふ、お前の放蕩が内的必然であるならば、思ひ切つて極端に放蕩することは、それだけ離して云へば、ちつとも悪くはない。お前はそれによつてお前の内の一つの有力な性質をよく生かすことが出来るのだ。お前はかなり烈しい Sensualist である事を自證した。さうして Sensualist のみが高い人間になれることを、多くの聖者藝術家思想家が證明してゐる。お前がもつと猛烈になりたいと思ふのは、この意味から云つて不都合ではないと思ふ。

併しお前は放蕩に耽り出す前にまるで違つた生活の中心を持つてゐた事を忘れてはならない。それは永遠を戀ふる心である。大いなる愛に生きやうとする努力である。お前は蕩兒となると共にこの内心の要求をどうしたか。——お前はそれを萎縮させた。

それを誤魔化した。それを麻痺させた。

お前の精神全體は、生活全體は、この時から不具になり無秩序になつた。

もしお前が Sensualist として一步を進めると共に、更に求道者として一步を進め得る程強かつたならば、そこに意久地ない蕩兒の代りに、いのちに充ちたファウストが出来上つたらう。

なに？ 「私は愛を求めて放蕩した」？ そんな生温い辯解はしない方がいゝ。成程女を求めるのは、完全な自己の半身となる女を求めるのは、男性の必然性だ。そのためにこそ個々の女に失望した男は、多くの女を通じて女性そのものを求めるのだ。それが生活原理としてのドン・ホアニズムだ。併しそこにはたゞ利己主義があつて眞の愛はない。それが人性の自然である理由を以て、他のあらゆる人性の自然を殺す者は、不具な實驗の生活しか出来まい。もし彼の内になほ健全な生の本能が生きてゐるならば、彼は遂に烈しい空虚と絶望に陥らないではゐられないだらう。さうでなく晏然と

何時までも放蕩する奴は、實はもう生きてはゐないのだ。精神がないのだ。生きて骸になり切つたのだ。

勿論私はお前が絶えず情愛を求めてゐたことを否定するのではない。唯それが女に可愛がられたい——云ひ換へれば女の愛を利用して自分の利己主義(情慾)を満足させやうといふ心に過ぎなかつたと主張するのだ。お前は情愛を求める。併し自分の方から情愛を投げかけない。お前は母が子供を愛するやうに女が自分を愛することを要求する。併し父が子供を愛するやうに女を愛してやらうとはしない。つまり眞に能動的に「人間を愛する心」がないのだ。

こゝにお前の恐るべき弱點がある。其たれにお前は愛のない享樂にのみ走つたのだ。お前の戀は肉の美しさなつかしさへの執着であつて、女の魂を勞はり活かし自分の内に融かし込まうとする熱愛ではなかつた。お前は女の内に人格を見やうとはしない。女の人格を踏み躪ることをも恐れぬ。そのくせ女から献身と同情と勞撫とに充ちた

愛を要求する。即ちお前は自分が愛するものとしては女が美しいニムフである事を望み、自分を愛して呉れるものとしては女がマリアであることを望むのだ。

私は繰り返してお前の注意を喚起する。お前はこれ迄永い間「人間を愛すること」を忘れてゐた。さうしてそこにお前の放蕩生活の核心があつた。トルストイも云つてゐるやうに、放蕩の要點は肉體的の亂暴にあるのではない、本當に放蕩の名に價する事實は、肉體上の交りを結んだ女と一切の道德的關係に立つことを避ける處に成立するのだ。即ち女を「人間」として取扱はない自分の行爲を自分で是認する處にあるのだ。お前はたゞ外形的な種々の行爲を特徴として放蕩生活を考へてゐるやうだが、それはまだ眞に放蕩の暗い底を見得ないからだと思ふ。幾人の女に關係しやうとも、いかに女に甘くならうとも、それだけでは必ずしも放蕩とは云へない。

お前は自分の放蕩をまだくゞり方が足りないと思つてゐる。併しお前のやつて來た行爲をたゞ外形的にのみ考へて見れば、トルストイやストリンドベルグには決して

負けないのだ。お前の足りないのは放蕩の外的經驗ではなくて、放蕩に際しての内的經驗だ。お前は自分の生活を深く掘り下げるといふ事の意味をまだ理解してゐない。生活の豊富は内界の豊富であることを、対象の豊富は対象を見る眼の豊富であることを、お前はまだ解してゐない。「如何に經驗したかゞ重大だ」など、お前の云ふのは、まだくゞ口眞似に過ぎないのだ。それが本當に解つたら、恐らくお前は慚愧のためにその言葉を口へ出す事が出来なくなるだらう。

お前は悔恨を感じてゐる。併しそれはまだお前の全心を浸さない。お前は自分の「人間が悪い」と云ふ。併しこの言葉の恐ろしさには打たれてゐない。お前の口振りには何處かまだ空々しい「口先の甘さ」が匂つてゐるのだ。自分の苦しみを逃げたがる氣の弱い兄弟よ。あらゆる殻を脱ぎ捨て、直ちに自分の心臓から物を云へ。さうして自分の苦しみの奥底をまともに、たじろがすに見つめろ。自分の悪さを眞に悔いる者は自分で自分を地獄の火に焼かないではゐられないのだ。お前は自分を自分で罵る

事によつて手軽く宥免を期待してはゐないか。自分の生の暗さからあまりに早く眼をそむけたがりはしないか。お前の生活のどん底は外的の境遇に従つてこれから先に現はれるものではなく、自分の心を見るお前の眼が開けると共に、現在の生活の内に認められて来るのだ。お前の自覺が出なければ、たとへて乞食にならうと人殺しにならうと、どん底へ来た氣持にはなれないのだ。墮落、悪、腐敗——これらの事の深さは唯それを感じる心の深さに従つてのみ生ずる。お前はまだどん底へ落ちてゐないなど、考へてはいけない。自分の「人間が悪い」といふ事を本當に了解しろ。それが自分の生活を掘り下げる所以だ。そこにどん底があるのだ。さうしてまた本當の光明があるのだ。

偉れた藝術家の作品に描かれた「人間の悪さ」を、いかに感動して讀まうとも、それはお前の美的受用であつて、直ちにお前自身の道義的生活ではない。美的受用の際に高められた精神が、眞に自己の内に根を張るには、能動的な峻巖な自己活動が必要なのだ。お前の生活にはこの能動性が足りない。お前は美的受用の興奮に満足する傾

きがある。

またお前は偉れた藝術品を作るために悪い事をする必要があると考へてゐるやうだ。併しさういふつもりでした事が本當にお前の體驗になると考へてゐては、到底救はれないだらう。外形的に云へばどんな經驗だつて出来るかも知れない。併しその經驗の眞の意味は結局解らないだらう。例へば女をよく描くためにお前がもつとく、色道修行をやるごする。その時お前の大きい愛はどうなるのだ。その結果はお前の過去が示してゐる。もしお前が覺めかけた本心を押し殺してその代り潤澤の金を握つたなら、恐らく種々な女の心と體を汚したあとで、悟りすましたやうな顔附をして茶の湯にでも凝る事になるだらう。

——私はお前の上に種々な非難と警語とを積み重ねた。併し私はその故にお前が私の愛を感じて呉れると信じてゐる。あゝお前はまた唇のほごりに軽い冷笑を浮べる。……それはお前の心臓から出た表情ではあるまい。もう此際になつて自ら欺いた所で

何になるのだ。心弱き兄弟よ。

ともあれ私はお前の前途を祝福する。強くなれ、強くなれ、愛に於て強くなれ。徒らに偶像を頼るな。精神の薄弱な者が小さい奇蹟の催眠術に掛つて借着の信仰を獲るやうに、或は運命の不思議と御利益とを結びつけて盲目的な狂信者になるやうに、意外地なく軽々しく他力に縋るのは、傍から見てもハラハラする。一つの靈異を見まもるのはいゝ事だが、併し人性の大きい流れからは目を離すな。ロシアの僧院生活を最もよく活かし最も深く人性に交渉させたのは、僧侶でなくてドストイェフスキイであつた。靈異を行ふ人が無數に輩出する近代の世界文化に於て、最も力強く神の力を示現したものは、それら宗教の開祖ではなくて、寧ろドストイェフスキイ、トルストイ、ストリンドベルグその他の偉大な藝術家であつた。お前も亦彼らの如く自分の足でこの流に踏み込むことを忘れてはいけない。催眠術によつて不安と焦燥とを取り除かれた所でそれが何になるのだ。不安を除いて貰はうとするな。自分から不安を乗り

超え打ち克つことによつて、大きい自由の境地に出ることを心掛ろ。さうしてその足跡を人性の内に永遠に残して呉れ。お前がその偶像から偉大な「日本の基督」を作り出し得たら、人類はどんなに喜ぶだらう。

迷ひ易き兄弟よ。眞に愛ある人になれ。自己を善きものに鍛錬せよ。標的を持つことが、即ち努力することが、生活そのものであることを悟つてくれ。製作するよりも「人」になるのが大事だ。もしお前が本來藝術家であるならば、たとへ「人」になる努力ばかりをしてゐても、結局否應なしにお前の仕事は藝術となつて現はれる。藝術家になるならぬは素質の問題だ。「人」になるならぬは生活そのもの、問題だ。先づ「人」になるために、善き人になるために、自分の手から鐵槌を放すな。(時間的にこれを先にしろといふのではない。この方をより intense にしろと云ふのだ。)

私は無遠慮に云ひたい事を云つた。それはお前を愛する父の言葉の受買りだからだ。併し私も亦お前の弱い迷ひ易い道連れだ。お互に愛し合ひ扶け合はうではないか。

五 情欲と淨化の要求と

偉大な藝術家で情欲と淨化の要求との葛藤をその製作の主題としないものはない。その解決を人間性質の大きい調和に求めるにしても、或は情欲の克服に求めるにしても、どに角彼らは烈しい内的苦闘を経験しなければならなかつた。彼らの偉大さはその苦闘の深さに比例してゐるやうである。

もとよりこれと趣の違ふ流行作家もある。安價な功利主義唯物主義の隆盛な時代に、それは何の不思議でもない。併しそれらは總て呪ふべき事である。人生のためにも、また眞正な藝術家のためにも。

ドン・ホアンと聖者との對立。これは永遠に人性の問題として残るだらう。さうして自分の内にこの對立を意識する人のある限り、十九世紀は盡きざる興味を以て人生に迫るだらう。二十世紀の幕を開いたロマン・ロオランがトルストイの弟子であることは

著しく我らの興味を引く。北歐の嚴肅な、同時に愛に充ちた精神は、爛熟し弛緩した南歐の文化を克服しないでは措くまい。我らの世紀はグエテを再現するか。併しそれはストリンドベルグの後のゲエテでなければならぬ。

この事に就て私は私の眼を開いてくれたキエルケゴオルに感謝する。

六 幼稚云ふこと

幼稚といふ言葉は普通價値の低小を意味して用ひられてゐる。併し「幼稚であること」それ自身は果して悪いか。

人は一躍して老熟するわけには行かない。従つて少年は少年らしい幼稚さを、青年は青年らしい幼稚さを、脱がれ得ぬものである。それは自然であつて、些かも嘲ふべきことではない。併しこの自然の幼稚さが少年らしい或は青年らしい猛烈な成長を示唆して居ない限り、それはいのちの停滞として見る者を不愉快にする。この場合の幼稚は恥づべきものである。「幼稚であること」が悪いためでなく、成長すべきものが成長して行かないために。

人はまた成長の速度の速いものに比べて遅いものを幼稚と呼ぶ。これは穩當でない。人がその性質に従つて歩度を異にするのは、極めて自然だからである。遅い者もその

力強い歩調を生涯續けて行けば、遂にその標的に達し得るだらう。速い者は幾何も駆けない内に疲れて動けなくなる危険がある。精神的勞作を職とする日本人の内には後者に屬するものが頗る多い。我々は寧ろ、歩度の遅かるべき性質を有するものが強ひて速く駆けやうとする所に、著しい幼稚さの現はれることを注意しなければならない。こゝでも悪いのはその幼稚さではなくて、自分に許されない無理をすることである。併し幼稚として嘲けられる最も悪いことは他にある。それは自分の幼稚さを知らないことである。特にその結果として自分を實際「ある」以上に考へまた振舞ふことである。(これも亦無知と盲目とから出る態度が悪いのであつて、幼稚そのものが悪いのではない。)

自分の幼稚さを知らない者は屢他の優越を看過して自分をその優れたものゝ上に置かうとする。これによつて彼自身の價値は低くはならない。併し彼の成長は著しく害せられるだらう。

例へば自欺によつて自分の價値を過信したものは、自分の眞の位置を知らない。彼は或事を發見して人類に新しい寶を與へる様な氣持になる、——併しその事は更に優れた深い形で既に人類の寶になつてゐるのである。彼がその事を自分の道の上で發見したのはいゝ事に相違ないが、併し彼はそれを以て自己の獨創と優越を誇る代りに、人性の大きい流れの深さに驚異し、自己の在來の幼稚を耻づべき筈であつた。この自覺によつて彼は自己の位置を知り、誇りの代りに苦しみを得、更に突き進むべく追ひ立てられるのである。しかも彼れにはこの事がない。従つて彼の幼稚は何時までも乗り越されないのである。

自分の幼稚さを知らない者はまた自分の長所に眩惑して、何處に自分の研ぐべき所があるかを見やうとしない。たとへ時に不安を感じても、自分の長所の故に自分を慰め、強ひて自分を安心させる。

例へば自分の内生の優越を信じて、自分の藝術家的な性質(形、様式、リズム、調

和などに對する敏感)の幼稚に氣附かないものがある。たとへ彼の内生の優越を彼の信する通りに許すとしても、彼の作品が彼の信する如く價值高きものである事に同意する事は出来ない。藝術はその手段に制約せられる。手段の拙劣は現はすべきものを充分に現はし得なかつた事の表示である。如何に優れた内生を現はさうとしてゐても、それが現はれてゐない以上、その藝術は無價値である。彼がその幼稚さの何處にあるかを知らない内は、彼の成長を期待するわけに行かない。

また自分の藝術家的性質の優越の故に、敢て自分の幼稚さを見まいとするものがある。彼はその現はさうとする所のものを巧妙に現はし得る。併し彼はその巧妙に自足して、その現はさうとするものがあまりに小さくあまりに少ない事には心を配らない。彼は益々巧妙な奇警な藝術を作り得るだらう。併し遂に大きい高い藝術は、彼からは産れまい。私はこの意味の幼稚な藝術家が日本の土に最も適してゐるのではないかを疑ふ。特に「江戸」はその意味で最も豊沃な地であつた。藝術の分野に就て云へば、日

本書家に最もそれが多い。併し小説家にも少くはない。私は若々しい大望と溢れるやうな情熱の持主である筈の青年たちが、たゞ巧妙と奇警とを覗つて、骨の乾いた冷たい老人にふさはしい手さきの器用さを見せやうと努めてゐるのを見ると、何とも云へず惨ましい氣持がする。彼らにはその幼稚を自覺するのは苦痛かも知れない。此儘で進んで行くのが一番いゝ道だと抗辯したいかも知れない。併し私は彼らの天分の豊かさを思へば思ふほど、彼らがつと本當に苦勞しやうとしないので、残念に思ふ。

幼稚を脱する第一の道は幼稚を自覺することである。それは人を不安にし苦しめる。併し彼の本能が頽廢してゐない限り、彼を成長させないでは措かない。

自分の幼稚を自覺するには、偉大なものが何故偉大であるかを出来るだけ深く、自分の心臓によつて理解しやうと努めるのが、最善の方法である。

七 或思想家の手紙

秋の雨がしと／＼と松林の上に降り注いでゐます。折々赤松の梢を揺り動かして行く風が消えるやうに通り返りすぎたあとには、——また田畑の色が豊かに黄ばんで來たのを有頂天になつて喜んでゐるらしいおしやべりな雀が羽音を揃へて屋根や軒から飛び去つて行つたあとには、たゞ心に沁み入るやうな静けさが残ります。葉を打つ雨の單純な響にも、心を捉へて放さないやうな無限に深い或力が感じられるのです。

私はガラス越しにじつと窓の外を眺めてゐました。さうしていつまでも身動きをしませんでした。私の眼には涙がにじみ出て來ました。湯加減のいゝ湯に全身を浸してゐるやうな具合に、私の心は或大きい暖かい力にしみ／＼と浸つてゐました。私はただ無條件に、生きてゐる事を感謝しました。總ての人をかういふ融け合つた心持で抱

きたい、抱かなければすまない、と思ひました。私は自分に近い人々を一人々々全身の愛で思ひ浮べ、その幸福を真底から祈り、さうしてその幸福のためにありたけの力を盡さうと誓ひました。やがて私の心はだん／＼廣がつて行つて、まだ見たことも聞いたこともない種々の人々の苦しみや涙や歎びやなどを想像し、その人々の爲に大きい愛を祈りました。殊に血なまぐさい戦場に倒れて死に面して苦しんでゐる人の姿を思ひ浮べると、私はじつとしてゐられない氣がしました。

私は心臓が變調を來たしたやうな心持でとりとめもなくいろいろな事を思ひ續けました。——併しこれだけなら別にあなたに訴へる必要はないのです。あなたに聞いて頂かなければならない事は、その後一時間ばかりして起りました。それは何でもない小さい出來事ですが、併し私の心を打ち砕くには充分でした。

私は妻と子と三人で食卓を圍んでゐました。私の心には前の續きでなほさまざまの憂や考が流れてゐました。で、自分では氣がつかせませんでした。私はいつも考に耽

る時のやうに人を寄せつけないムツかしい顔をしてゐたのです。私がさういふ顔をしてゐる時には妻は決して笑つたりハシヤイだりは出来ないで、自然無口になつて、いくらか私の氣ムツかしい表情に感染します。親達の顔に現はれたかういふ氣持は直ぐ子供に影響しました。初めおとなしく食事を取つてゐた子供は、何故とも解らない不満足のために、だん／＼不機嫌になつて、とう／＼ツマラない事を云ひ立て、愚圖り出しました。かういふ事になると子供は露骨に意地を張り通します。勿論私は子供の我儘を何でも押へやうとは思ひませんが、併し時々自分の我のどうしても通らない障壁を經驗させてやらなければ、子供の「意志」の成長のためによろしくないと思へてゐます。で此時にも私は子供を叱つてその我儘を押し潰さうとしました。——何時の間にか私は子供の我儘に對して自分の意地を通さうとしてゐました。私は涙ぐみながら子供の泣くのを叱つてゐました。おしまひには私も子供と一所に大聲を擧げて泣きたくなりました。——何といふ馬鹿な無慈悲な父親でせう。子供の不機嫌は自分

が原因をなしてゐたのです。子供の正直な心は無心に父親の態度を非難してゐたのです。大きい愛に就て考へてゐた父親は、この小さい透明な心をさへも暖めてやる事が出来ませんでした。

私は自分を呪ひました。食事の時ぐらゐは何故他の者と一所の氣持にならなかつたのでせう。何故子供に對してまで「自分の内に閉ぢ籠ること」を續けたのでせう。私が總ての人を愛で以て抱きたいと思つたことは本當です。それに關係していろ／＼「いゝ事」を考へ續けてゐたことも本當です。併し直ぐその場で自分に最も近い者をさへも充分愛してやれないくせに、そんな事を考へ續けたつて何になるでせう。しかもそれが、その運命に對しては無限の責任と恐ろしさを感じてゐる自分の子供なのです。不斷に涙を以て接吻しつゞけても愛し足りない自分の子供なのです。極度に敬虔なるべき者に對して私は極度に輕卒に振舞ひました。羞かしいどころではありません。

私は此事によつて自分のもつと重大な色々な缺點を示唆されたやうに思ひました。

私は自分のイゴイズムと戦つてゐます。イゴイズムその者の絶滅は望まれないまでも、イゴイズムをして絶対に私の愛を濁さしめないことは、私の日常の理想であり又私の不漸の鞭です。この志向だけに就て云へば別に問題はありませぬ。これが眞に自己を生かせる道ですから。

併し私は自己を育てやうとする努力に際して、この努力その者がイゴイズムと同じく愛を傷ふことのあるのを知りました。私は仕事に力を集中する時愛する者たちを顧みない事があります。私を愛してくれる者は勿論それを承知してその集中を妨げないやうに、若くはそれを強めるやうに、力を添へてくれます。併し自分を犠牲にしてまでそれに盡してくれる者はたゞ一人きりです。他の者たちは、私からされる様に望んでゐる事を私が果さない場合に、やはり私を不満足に思ひます。さうしてそれがその人たちのツマラない我儘から出てゐる場合でも、私を怨み憤ります。私は彼等の眼に

冷淡な薄情な男として映るのです。

殊に私は時々何かの問題のためにひどい憂愁に閉ぢ込められる事があります。私はいくらあせつてもこの問題を逃避しない限り或「時」が来るまでは自分をどうすることも出来ないのです。私もまさかこのジメ／＼した氣分を側の者に振りかけなければゐられない程弱くはありません。併し人の前でそれを少しも顔に出さないでゐられる程強くありません。私は暗い沈んだ顔をして黙り込んでゐます。さうしてこの表情のために愛するものたちを不幸にします。かういふ時に私は彼らを勞はつてやることも、彼らを喜ばせる事も、彼らと共に喜ぶことも出来ないのです。私の心は石のやうに固まつて、たゞ温められ融かされる事を望むばかりです。私にとつては一つの憂愁を切り抜ける事はいくらかの成長になります。併しそのために私は或時の間冷たい人間になつてゐます。

實際私たちのやうな仕事を選んだ者は、或一つの輝いた瞬間を捕へるために、果實

のない無駄な永い時間を費やすことがあります。さういふ時に人が、そんなにノラク
ラしてゐる位なら、と思ふのも無理はないと思ひます。自分でさへさう感じる事が時
にはあるのですから。私は私たちの心持に同情のない要求に直ぐ従はうとは思ひませ
んが、併しなほ自分をどうにかしなければならぬ事を切に感じます。日常の生活は
實に貴いのです。言譯が立つからと云つて、なすべき事をしないのは矢張りいゝ事では
ありません。たとへ仕事に全精力を集中する時でも「人」として振舞ふことを忘れ
てはならない。それが出来ないのは弱いからです。愛が足りないからです。

私は自分の仕事のために愛する者の生活をいくらかでも犠牲にすることを恥ぢます。
この犠牲を甘んじて受けるのは、取りもなほさず、自分の弱さを是認するのです。私
は弱さに安んじたくありません。自分の弱さのために他の運命を傷け犠牲にするなど
は、あまりに恐ろしい。

三

また私は人を責めることの恐ろしさをもしみくく感じました。私は或思想に據つ
て行爲を非難する事があります。さうして時には自分の行爲も亦同じ様に非難せられ
なければならぬ事を忘れてゐます。

或時私は友人と話してゐる内に、だんく他の人の悪口を云ひ出した事がありまし
た。對象になつたのは道徳的の無知無反省と教養の缺乏とのために、自分のしてゐる恐
ろしい悪事に氣附かない人でした。彼は自分の手で或人間を腐敗させて置きながら、
自分の罪の結果をその人のせいにして、たゞその人のみを責めました。彼は物的價値
以外を知らないために總てを此價値によつて律しようとし、最も嚴肅な生の問題をさ
へもさういふ心情の方へ押しつけて行きました。さういふ罪過はいろくな形で彼に
報いて來ましたが併し彼はその苦惱の眞の原因を悟る事が出来ないのです。私はそ
の人の人格に同感すればするほど不愉快を感じます。さうしてその苦惱に同情するよ
りもその無知と卑劣が腹立たしくなります。——で私は友人と二人でヒドイ言葉を使

つて彼を罵りました。私の妻は初めから黙つて側で編物をしてゐました。やがて（いつも悪口をいふ時にさうであるやうに）私はだん／＼心の空虚を感じて来て、ふと妻の方に眼をやりました。妻も眼を上げて黙つて私を見ました。その眼の内には、一撃に私を打碎き私を恥ぢさせる或物がありました。——私の缺點を最も好く知つてしかも私を自分以上に愛してゐる彼女の眼には。

私は直ぐ口を噤みました。後悔がひどく心を噛み始めました。人を裁くものは自分も裁かれなければならぬ。私はあの人を少しでもよくしなければならぬ立場にありながら、あの人に對する自分の悪感のみを表はしたのです。私の悪感に彼を益々悪くしやうとも、善くする筈はありません。既にこれ迄にも彼を壓迫する事によつて彼の自暴自棄を手傳つたのは、私であつたかも知れません。私も亦彼の頽廢に就いて責を負ふべき位置にあるのです。殊に私は（物的價値に重きを置かないと信じてゐる私は）彼のためにどれだけ物的の犠牲を拂つてやりましたか。物的價値に執する彼の態

度への悪感から私は寧ろさういふ盡力を避けてゐました。さうしてこの私の冷淡は彼の態度を益々淺ましくしました。こゝでも亦私は責を脱れる事が出来ないのです。畢竟私の非難が私自身に返つて來ます。

私は自分の思想感情が如何に浮ついてゐるかを知りました。私が立派な言葉を口にすると、それは實におほけない業です。罵つても罵つても罵り足りないのは矢張り自分の事でした。

四

私は道徳をたゞ内面的の意義に就てのみ見やうとして居ます。さうして他人の不道徳を罵る時にはその内面的の穢なさを指摘しやうとします。

併し自分の心はどれほど清らかになつてゐるか。恥づべき行爲をしないと自信してゐる私は、心の中ではなほあらゆる悪事を行つてゐるのです。最も狂暴なタイラントや最も放恣な遊蕩兒のしさうなことまでも。勿論私は氣附くと共にそれを恥ぢ自分を

責めます。併し一度心に起つた事はいかに恥ぢやうとも全然消え去るといふ事はありません。時には私は自分の心が穢いもので一杯になつてゐる事を感じます。私たちはこの穢いものを恥ぢる故に、抑壓し征服し得る故に、安んじてゐていゝものでせうか。私は自分に親しい者たちの心の内に同じ様な穢ないものがある事を想像するのはとても堪らない。それと同じく他の人も私の心の暗い影を想像するのは非常に不愉快だらうと思ひます。私はどうしても心を清淨にしたい。たとへそのために人間性質の感點に關する興味が涸渇しやうとも。私が他人を罵るのは畢竟自分を罵ることでした。他人の内に穢ないもののある事を見出すのは、要するに自分の内にも同じものゝある證據に過ぎませんでした。

五

あまりジメ／＼した事ばかりを書いてすみません。併しあなたに訴へれば私の胸はいくらか軽くなるのです。

私たちが今矮小だといふ事實は、實際私たちを苦しくさせます。けれども苦しいからと云つてこの事實を認めないわけには行きません。私よりも聰明な人は私よりもつとよくこの事實を呑み込んでゐると思ひます。自分の小ささを知らない青年はとても大きく成長する事は出来ません。

併しこの事實の認識はたゞ「愚痴」といふ形にのみ現はるべきものでないと思ひます。愚痴をこぼすのは相手から力と愛を求めることです。相手にそれだけ力と愛が横溢してゐない時には、勢ひ愚痴は相手を弱め陰氣にします。我々から愛を求めてゐる者に對して我々の愚痴を聞かせるのはあまりに心なき業だと思ひます。

私たちは未來を知らない。未來に希望をかける事が不都合なら未來に失望する事も同じやうに不都合です。併し私たちは唯一つ、生が開展である事を知つてゐます。私たちはたゞ未來を信じて、現在に努力すればいゝのです。努力のための勇氣と快活とを奮ひ起せばいゝのです。現在の小ささを悟れば悟るほど努力の熱は高まつて來ます。

自分の運命を信じて、今に見ろ／＼と云ひながら努力することは、自分に對して、のみならず、自分の愛する人々を力づけ幸福にする意味で、他人のためにもいゝ事です。何處まで行けるかなどといふ事はこの場合問題ではありません。

たゞ私はこの運命の信仰が現在の無力の自覺から生れてゐる事を忘れたくないと思ひます。こゝに誇大妄想と眞實の自己運命の信仰との別があるのです。成長しないものと不斷に力強く成長するものとの別があるのです。前者は自己を誇示して他人の前に優越を誇ります。後者は自己を鼓舞し激勵すると共に、多くの悩み疲れた同胞を鼓舞し激勵します。

あなたに愚痴をこぼしたあとでこんな事をいふのは少しおかしいかも知れません。併し私はあなたに愚痴をこぼしてゐる内に自然かういふ事を云ひたい氣持になつて來たのです。

六

私はどんなに自分に失望してゐる時でも、やはり心の底の底で自分を信じてゐるやうです。眼が鈍い、頭が悪い、心臓が狭い、腕がカジカンである、——どの性質にも才能にも優れたものはない、——しかも私は何事をか人類の爲になし得る事を深く固く信じてゐます。もう二十年！ さう思ふどぐツたりしてゐた體に力が漲つて來る事もありません。

運命と自己。此問題は久しく私を悩ませました。今でもよく解りません。併しこれまで經て來た自分の道を振り返つて見ると、重大な事は總て豫期を絶してゐました。これから起る事も恐らく豫期をはづれた事が多いでせう。私はいろ／＼な事を考へたあとでいつも「明日の事を思ひ煩ふな」といふ聖語を思ひ出し、總てを委せてしまふ氣になります。さうしてどんな事が起らうとも勇ましく堪へやうと決心します。

併し私は既に與へられたものに對しては吞氣である事が出來ません。運命が自分をいかに變化しやうとも自分が他人になる事は決してありません。私の個性は性格は

私の宿命です。どういふ樹になるかは知らないが、芽は既に出てゐるのです、伸びつつあるのです。芽の内に花や實の想像はつかないとしても、その花や實が既に今準備されつゝある事は確かです。今はたゞ出来るだけ根を張り出来るだけ多く養分を吸ひ取る事の他になすべき事はないのです。いよく果實が熟した時それがいゝ味を持つてゐなくても、私は精一杯いゝ實をならさうと努めたことで満足しやうと思ひます。

とは云へ自分の才能のことは繰返し／＼問題になります。さうして才能を重大視するなどいふ色々の人の言葉が、私の底冷のしてゐる心に温かい慰めを與へてくれます。天才は勉強だ、彼等の才能はさほど特殊なものではない、(ニイチエの様な人ですら三十四の年にかう云ひました。)才能少くして偉大な人間になつた人はあらゆる方面にある、彼等はたゞ誤魔化しをしない、堅實な、辛抱強い Handwerker-Ernst があつたのだ。

かういふ言葉が私に力をつけてくれます。まことに英雄的生活が試練と痛苦と精力と勤勞とに於て主に偉大であつたことは、私たちの勇氣を鼓舞し私たちをふるひ立た

たせます。憐れなる悩める者も誠實な勇氣と努力とを以てすれば遂には何者かになり得るのです。偉大な人々の悲劇的生活は私たちの慰藉でありまた鞭であります。彼等が小さい一冊の本を書くためにも、その心血を絞り永年の刻苦と奮闘とを通り抜けなければならなかつた事を思へば、私たちが生温い心で少しも早く何事かを仕上げやうなどと考へるのは、あまりに呑氣で薄ッぺらすぎます。

七

私は才能乏しくしてしかも善良なる人が、宿命として自分に押しつけられてゐる自分の性質を、呪ひ苦しんでゐるのに出逢ふ毎に、わけもなく涙ぐましい心持になります。殊に彼が沈黙と憂愁との内に靜かに首垂れてゐるのを見ると、じつとしてゐられないやうな、飛びついて抱いてやりたいやうな心持になります。一つには身にツマされるせいもあるでせう。併しこの悲哀は人類の悲哀です。この悲哀にしみ／＼と心を浸して、共に泣き互に勵まし合ふのは、私にとつては最も人間的な氣のする事です。

私はいかにいふ人に對して如何なる場合にも高慢である事は出来ません。特にその才能の乏しいのを嘲ふやうな態度は、恐ろしい冷酷として、寧ろ憎むべき事に思ひます。才能の乏しいのは確かにいふ事ではないでせう。併し才能が人間の總てではありません。才能の乏しい者にも愛すべき者があり才能の豊かな者にも卑しむべき者があります。才能を重んずる現代の社會から、特に才能に富んだ人を集めた特殊の場所からは、あまり偉大な人が生れて來ないといふ事實は、いかにも反語らしく私たちの心に響きます。私は才能を誇りながら遂に何の仕事をも成し遂げない高慢な人よりも、才能の乏しい謙遜な人の方を遙かに愛しなつかしみます。

けれども私は、同じく自分の凡庸を意識してゐても、それを誤魔化さうとか、つてゐる人に同情する事は出来ません。彼等は何等かの點で自分を是認し安心しやうとするのです。私はいかにいふ人の前に出ると、ひどい腐敗の臭氣を感じます。さうして、悲しむべき事を悲しまず、偉大な者に跪かず、必竟人類の努力に對して没交渉であら

うとする彼等の態度に、抑へ難き憤怒を感じます。しかもこの様な人が如何に多いこととせう。彼等の前には偉大な藝術も思想も味なき鹽と異ならないのです。彼等は、全體、人生が偉大である必要を認めないのです。

私は正直に惱む人に對しては同胞らしい愛を感じます。現世の濁つた空氣の中に何の不滿もなさうに榮えてゐる凡庸人に對しては、烈しい憎惡を感じます。安價な樂天主義は人生を毒する。魂の饑餓と欲求とは聖い光を下界に取り下さないでは息まない。人生の偉大と豊饒とは必竟心貧しき者の上に惠まれるでせう。惱める者貧しき者は福なるかな。私は自分の貧しさに嘆く人々が一日も早く精神の王國の内に、偉大なる英雄たちの築いたあの王國の内に、限りなき命の泉を掬み、強い力と勇氣とを以てふるひ立つ日の來らんことを祈つてゐます。

八

もう夜が更けました。沈んだ心持で書き始めたこの手紙をとりとめもなく書きつづ

けて行く内に、私は興奮して五體に力の充ちたことを感ずるやうになりました。あなたは喜んで下さるでせう。あなたに読んで頂くずつと前に、あなたに手紙を書いたといふ事だけで私にはもう効能があつたのです。私は此手紙に論理的連絡の缺けてゐる事を知つてゐます。併しそれはかまひません。私はもう此手紙を書き初めた時の目的を達しました。

空が物凄く晴れて月が鋭く輝いてゐます。蟲の音は弱々しく寂れて來ました。私は今あなたと二人で話に夜を更かした時のやうな心持になつてゐます。では安らかにおやすみなさい。

八 停車場で感じたこと

或雨の降る日私は友人を郊外の家に訪ねて晝前から夜まで話し込んだ。遅くなつたのでもう歸らうと思ひながら、新らしく出た話に引張られてつひ立つことを忘れてゐた。ふと氣附いて時計を見ると、自分が乗ることにきめてゐた新橋發の汽車の時間が大分迫つてゐる。でいよく別れることにして立ち上らうとした。その時また一寸とした話の行掛りでは十分程尻を落ち附けて話し込む様な事になつた。それでも玄關へ降りた時には、左程急がずに汽車に間に合ふつもりであつた。で玄關に立つたまま、それまで忘れてゐた用事の話と思ひ出して、暫く話し合つた。

電車の停車場の近くへ來ると、丁度自分の乗る筈の上り電車が出て行くのが見えた。「運が悪いな、もう二三分早く出て來たら。」と思つた。待合へはいつてから何氣なしに

正面の大時計を見ると、何時の間にか大變時間が経つてゐる。變だなど思つて自分の時計を出して見る。自分のは十分ほど遅れてゐる。午前には確かに合つてゐたのだが二時頃止まつてゐたのを友人の家のと合はせた時に、遅れた時間と合はせたわけなのだらう。これでは汽車の時間にカツ／＼だ、拙くすると乗り遅れるかも知れない、あの時時計が止まつてくれなければよかつた、など、思ふ。併し電車は直ぐ來た。それがまた思つたよりも調子よく走る。人の乗降りがあまりないので停車場などは止まつたかと思ふと直ぐ出る。時計を出して見ると三分位で一丁場走つてゐる。この分なら大抵大丈夫だと安心した氣持になる。

併し時間は一杯だつた。市街電車へ乗り換へる所へ來て、改札口で乗越賃を拂はうとすると、釣錢がないと云つて驛夫が向ふへ取りに行く。釣錢などでグズ／＼してはゐられないのでその儘直ぐ駆け出したくなる。併しあとから驛夫が大聲を出して追駆けて來たりすると氣の毒だと思つて一寸躊躇する。その間に驛夫が釣錢を持つて來る。

僅か一分程の間だつたが、そのためイラ／＼させられたので、急いで泥道を駆け出した。見ると停留場に電車がとまつてゐる。好い具合だと思つて速力を増して駆ける。五六間手前まで行くと電車は動き始めた。しまつたと思ひながらなほ懸命に追駆けて行く。電車はだん／＼早くなる。それを見てとても乗れまいといふ氣がしたので、私はふと立留まつた。その瞬間にあれに乗らなければ遅れるかも知れないと思つた。それで直ぐまた全速力で飛び出せば無理にのれない事もなかつた。併しその時ほんの一秒か二秒の間躊躇した。さうしてア、電車が遠ざかつて行くと思ひながら、その後姿を眺めた。その僅かな間に電車がまた四五間も走つたので、追いつける望はずつかり消えてしまつた。

振り向いて見ると、あとの電車は影も見えない。また時計を出して見る。矢張りあれに乗らなければ駄目だつたと思ふ。電車はまだつひそこに見えてゐるので、もう一度飛び出したくなる。口惜しくなつて足を踏みならず。齒ガミをする。拳に力がはい

つて来るが、その遣り場がない。後を見るとまだ次の電車は見えない。また先の電車を見る。見まもつてゐる内に次の停留場で止まつてまた動き出す。やがて坂をおりてだん／＼見えなくなる。あれに乗つておればもうあんなに遠く行つてゐるのだ。これだけ距離の差があれば汽車に二つ位乗り遅れるには充分だなどと思ふ。

次の電車が遙か向ふに見えた。時計を見ると三分経つてゐる。早く来ればいゝと思ふがなか／＼やつて来ない。やつと前まで来る。乗る。時計を見る。もう五分経つてゐる。時計と睨めくらしてゐると電車が走るわりに時の経つのが遅いのでいくらか氣丈夫にもなるが、併し窓から外を見る毎にまだこんな所かと思ふ。それでもまだ全然間に合はないと思へないので、熱心に時計に注意してゐる。平生は十分も二十分もかゝると思つてゐる處を、電車は五分位で走つてしまふ。

とてもさう早くは行くまいと思つてゐた時間で、感心にも電車は土橋の停留場まで来た。時計を見ると汽車が丁度出る時刻である。併しプラットフォームには汽車の影が

見えない。汽車だつて一分位遅れる事はあるし、自分の時計だつて一分位進んでゐないとは限らないなど、思ひながら停車場へはいつて行くと、その大時計は丁度汽車の時間よりも二分先へ出てゐて、驛夫が次の汽車の時間を改札口の上に掲示してゐる所であつた。

「あゝあと一時間と四十分だ。電車に乗る時の僅か一二秒のために、何といふへマだらう。否、その前に停車場を出る時釣鐘を取らなければよかつたのだ。否もう一つ前に友人の家から出た時もつと早く歩けばよかつた。さう云へば友人の所をもう五分早く出れば問題はなかつた。併しこんな事を云つてもキリがない。とに角總てがまづかつた。「何か」が俺に悪戯をしやがつたのだ。」——こんな風に腹のなかで呟きながら私はヤケに土間を靴で踏みつけた。

やがて私は未練らしく頭の上の時刻表を見上げた。さうして「おや」と思つた。そこには次の汽車との間に今までなかつた筈の汽車の時間が掲げてあるのである。私は

いくらか救はれたやうな感じであたりを見廻した。成程大きな掲示が出てゐる。その臨時汽車は直ぐ前日から運轉し始めたのだつた。「こいつは運がいい。」と私は思った。併し時間を勘定して見て矢張り一時間許り待たなければならぬ事が解ると、私の心はまた元へ戻り始めた。「何だ、こんな事で埋め合せをするのか、畜生め。」私は仕方なく三等待合室へはいつて行つた。見ると質朴な田舎者らしい老人夫婦や乳香兒をかかえた母親や四つ位の女の子などが、しよんぼり並んで腰を掛けてゐる。朝からその儘の姿でじつとしてゐたのではないかと思はせる位靜かに。その眼には確かに大都會の烈しさに對する恐怖がチラついてゐる。私は引きつけられてじつとその一群を見まもつた。さうして、遠くへ行く鈍い三等の夜汽車のなかの光景を思ひ浮べた。それは老人や母親にとつて全く一種の拷問である。併し彼らには貧乏であるといふ事の外に何にも白状すべきことがない。彼らは黙つて靜かにその苦しみに堪へる。寧ろ或遠隔な土地へ行くためにはその苦しみが當然であることを感じてゐる。たとへ眠られぬ真

夜中に、堅い腰掛の上で痛む肩や背や腰を自分でどうにも出来ないはかなさのため、幽かな力ない嘆息が彼らの口から洩れるにしても。

私はこんな空想に耽りながら、ぼんやり乳香兒を見下ろしてゐる母親の姿を眺め、甘へるらしく自分に寄り掛つてくる女の子を何か小聲で云ひなだめてゐるらしい、老婆の姿を眺め、見ることもなく正面を見つめてゐる老爺の悲しむ力をさへ失つたやうな顔を眺めた。私の心は急にしみくとして和らいで來た。何といふ謙虛な人間の姿だらう。それに比べて私の心持は、何といふ空虛な反撥心にイラ立つてゐるのだ。恰も自分の上に降りかゝつた小さな出來事が何か大きい不正でもあるかのやうに。——あの人達を見ろ。靜かに運命の前に首を垂れてゐるあの人達を見ろ。あれが人間だ。或暗示が私の胸に泌み入つた。私は何かを呪ふやうな氣持になつた先程の自分を恥ぢた。もしその何かが神だつたら！ 恐らく神と雖、もつとく比べものにならない程の苦しみを私の上に置く事もあるだらう。しかも恐らく私を愛する故に。不遜なる

者よ。極めて小さい不運をさへも、首を垂れて受けることの出来ない心傲れる者よ。そんな浅い心にどうして運命の深いこゝろが感じ得られやう。

私は固い腰掛に身を沈めて、先程までの小さい出来事を思ひ返した。一々の瞬間にさうならなければならぬ或者がひそんでゐるやうにも思へた。總ての條件が最後の瞬間を導き出すやうに整然たる秩序の内に繼起したやうにも感じられた。さうして私は自分を鞭打つた。私は自分の運命を愛してゐるつもりでゐたが、併し私はまだ本當に約百の心を解してゐないのだ。運命に對するあの絶對の信仰と感謝の心を。併せてまた「運命を愛せよ」といふあの金言の眞の深さと重さをも。

二

私はこの出来事が小さい家常茶飯の事である故を以て、その時の自分の心の態度を輕視する事は出来なかつた。寧ろそれが極めて單純にまた明白に、自分の運命に對する愛と反撥を示してくれた故を以て、いくらかの感謝の内にこの經驗を迎へる事が

出来た。さうしてこの單純な鏡に自分の生活のさまざまの相をうつして見た。例へば時間の代りに自分の努力を。汽車の代りに自分の仕事を。或は又、時間の代りに自分の生活全體を。汽車の代りに自分の永遠のいのちを。

さうして私はこゝにも自分の上に鍛練の鐵槌を下すべき必要を感じたのであつた。

三

私は思つた。私は自分の努力の不足を責める代りに、仕事がうまく行かなかつたことでイラ／＼する。自分の生活の弛緩を責める代りに自分がより高くないことイラ／＼する。さうして或惡魔の手を、——或は不運と不幸を呪はうとする。何といふ輕卒だらう。もしそれが自分から出た事ならば、私はたゞ首を垂れる外仕方がないではないか。私は自分の不足を憎んでも自分の運命を憎むべきでない。寧ろ自分の不足の故に自分を罰した運命に對して心から感謝すべきである。

私は未來を空想する。併し自分の現在が自分の未來をどう規定するかに就ては、實

際は無知である。それはたゞ自分の知慧が臆測の光を投げ込むに過ぎない底知れの深淵である。併しその深淵の隅から隅まで行き亘つてゐる或大いなる力と知慧との存在する事を、さうしてその力と知慧とが敏感な心に一瞬の光を投げることを否むわけに行かない。我々は不斷に我々の生活の上にかゝつてゐる運命に對してこの一瞬間のために、敬虔な疲れない眼を見はつてゐなくてはならぬ。一つの不幸も必ず何事かを暗示するに相違ない。それは呪はるべきものではなくて、愛せらるべきものである。

で私は思つた。いかなる運命もこれを正面から受けなくてはならない。さうしてそれが自分に必然であつたことを愛によつて充分根本的に理解しなくてはならない。かうなる筈ではなかつた」など、現在の或境遇に反響心を抱くことは、現實の生に對する不眞面目であり、また現實からの逃避である。そこにはもはや自己の改造や成長の望はない。我々はたゞ現在の運命を如實に見きはめることによつて、(既に起つた事に對する謙虚な忍従によつて)多産なる未來の道をきり開く事が出来る。時には過去の改

造さへ不可能ではない。

四

また私は「あの時あゝすれば間に合つたのに」と感じた自分の心理に就て考へた。「あの時」はもう過ぎ去つてゐる。さうして「あの時」には「あゝしなかつた。」それはもう變更の出来ない事實である。たとへ「あの時」私が、いづれの行爲をも自由に選び得たとしても、私の實行したのはたゞ一つであつた。この一つの外に事實はない。「あの時あゝすれば」といふ感じは、この事實が必然でなかつたと主張するに外ならない。併し果してこの唯一の事實が必然でなかつたのか。外にも歩まらるべき道があつたのか。私にはさう思へない。「事件の起る前には道はない、起つた時にはたゞ一つの道があるのみだ」といふ言葉は、私には動かし難い眞實として響く。

然らばこの必然性はどこから来るか。私は思ふ、我々の意志の關する限りに於ては恐らくそれは我々の性格から来るだらう。「性格は運命だ。」我々はこの運命を脱れる

ことが出来ない。

「あの時あゝすればかうはならなかつた」といふ運命への反撥心は、要するに事實に於て（無意識的にはあるが）自己性格に對する抗議である。しかもそれは無意識的なる故に、自己その者を責めることをせずして寧ろ漠然と或「不運」といふ如きものを呪ふ氣持になる。こゝに迷蒙と怯懦とのひそむことを忘れてはならない。「一つの不幸を眞に意義深く生かす所の力は、おく迄も自己自身に就ての微妙な、鋭敏な、嚴格な認識と批評とである。事實の責任を他に嫁せずして自己に歸することである。我々は自己の運命を最もよく伸びさせるために、徒らに過去を口惜しがるやうな愚に陥らないで、執拗な眼光を自己の内に投げなければならぬ。

五

私の思索はまた「外から迫つて来るやうに感せられる運命」の上に移つた。さうしてイキナリ私の胸にこだわつてゐる「死」の問題と結びついた。

もし突然私の身の上に「死」が迫つて来た時、私はたゞ恐怖に慄えるばかりだらうか、或はこれを悪魔の業として呪ふだらうか、もしくは又神の攝理として感謝を以て受けるだらうか。

もし先刻の事件を以て推論することが許されるなら、私は恐らく恐怖と呪咀とで狂ひ立つばかりだらう。しやうと思ふ仕事はまだ何一つ出来てゐない。昇らうと思ふ道はまだやつと昇り始めたばかりだ。今死んでは今まで生きたことがまるきり無意味になる。これはとても堪らない。——かう思つて私は「死」の來やうの早かつたことを呪ふだらう。更にまた自分の愛する者が自分の死によつて受ける烈しい打撃を思へば、彼らの生くる限り彼らにつきまといふ重い悲哀を思へば、死んでも死に切れないやうなイラ／＼しさを感じるだらう。

併し私は自分がもがき死することに堪へられるか。——とても、とても。私は心から静かな大きい死を望む。殉教者のやうに自信のある落ちついた死を。もし「死」と

いふ嚴肅な問題の前にさへも、今夜の出來事のやうに振舞ふとすれば、私は自分を何と云つて輕蔑してゐるか解らない。——けれども果して私はその輕蔑に價する振舞をしないだらうか。それ程私の腹は死に對しても据つてゐるだらうか。私にはそれ程の自信があるのか。

今夜これから汽車にのる。その汽車に何か椿事が起つて私が重傷を負はないものでもない。もし私が擔ぎ込まれた病院で醫者に絶望されながら床の上に横はるとしたら、さうして夜明けまで持つかどうか危ないとしたら、私はどうするだらう。逢ひたい人々にも恐らく逢へまい。整理して置きたい事も今更如何ともしやうがない。自分の生涯や仕事に就て心残りの多いのは云ふまでもない事だ。それでも私は靜かに死ねるだらうか。黙つて運命に頭を下げる事が出来るだらうか。——

私はかうして自分を押しつめて見た。さうして自分にまるで死ぬつもりのないことを發見した。「今死んでは堪らない。併し多分自分は永生するだらう。」かう云ふ思が私から死に對する痛切な感じを奪つてゐる。恰かも「死」といふ運命が自分の上にはかゝつてゐないかのやうに。結局私は「死」に對して何の準備も覺悟も出來てゐない。「死」を本當に眞面目に考へることさへもしないらしい。

併し私がもう五十年生きることが確實なのか。私が明日にも肺病にかゝるかも知れない事は何故に確實でないのか。——私は未來を知らない、死の迫つて來る時期をも知らない。「きつと永生する、」といふのはたゞ私の希望に過ぎないのだ。虫のいゝ豫感に過ぎないのだ。それに何故私は「死」を自分に近いものとして感じないか——抑も感じたくないのか。

「人は總て死刑を宣告せられてゐる、たゞ死刑執行の日がきまらないだけだ」といふ言葉がある。これは *Nan is mortal* を云ひ換へたに過ぎないが、併し特に私の胸を突く。さうだ、たゞ日がきまらないだけだ。死の宣告はもう下つてゐる。私たちは吞氣にしてゐられるわけのものではない。私たちは生きてゐる一日一日を感謝しなければ

ならない。さうして充實した氣持で生を感受し生を築かなくてはならない。生きてゐる内に immortal な生を掴むために、さうして出来るならば「死」を凱旋であらしめるために。

——私の心は何故ともなく奮ひ立つた。運命の前に静かに頭を下げ得るためには、今ボンヤリしてはゐられない。たとへ死が（自分に尾行して来る死が）豫期よりも早く自分の前に現はれやうとも、せめて現在に力の限りをつくしたと云ふ理由で、落ちついて運命に従ふことが出来るだらう。さうしてなすべき事をなした人間の權利として永遠に人類の生命の内に生きる事も出来るだらう。

これが私の覺悟であつた。あきらめの心持で運命に従ひ得るためには、一日もボンヤリしてゐられないといふ事が。

「明日の苦勞」は私がしなくてもいい。私はたゞ「今日の苦勞」を力一杯に仕上げやう。それが最も謙遜に運命に従ふ道だ。

六

時間が迫つたので私は堅い腰掛から立ち上つた。さうして幾度も躊躇しながら、老人と母親の一群に近づいた。私は心ひそかな感謝と同情のために一つの小さい親切をしやうと思つたのである。

先程私が考へ込んでゐた時に、雑役夫が掃除にはいつて來た。母親は彦根へ行く汽車はまだかときいた。雑役夫は突然の間にいくらかあはてながら、十一時九分、まだ一時間半ありますと答へた。併し私の乗つて行く臨時汽車は神戸の先まで行く。殊に運轉し始めたばかりの臨時汽車は人が知らないので殆んど數へる程の人数しか乗らない。恐らく皆が一晩（ゆつくりではなくとも）とに角寝通して行けるだらう。特に小供は助かる。それに反して普通の直行は臨時汽車の運轉を必要とする位だからひどくコムに相違ない——で私は臨時汽車のある事を教へたくて堪らなかつたのだ。

私は母親の前に立つた。さうして汽車のことを説明した。母親は知らない人から突

然口をきかれて、殆んど敵意に近い驚愕の色を浮べた。私が「もう直ぐ來ます」と云つた時には、慌てゝ立ち上つて、私に禮を云ふどころでなく寧ろ當惑したやうな顔附で、早口に老人や子供をせき立てた。もう彼女の心には私の方などに眼を呉れる餘裕がないらしく見えた。私は間が悪くなつてそんなに慌てなくともまだ時間はゆつくりありますと注意することが出来なくなつた。で仕方なく、側にゐる事を恐れる人のやうに、急いでそらツと待合室を出てしまつた。

汽車が來た。乗客は果して少なかつた。あの小供たちは樂をするだらうと思つて、私はひとりではゝゑんだ。

九 夏目先生の追憶

一

夏目先生の大きい死にあつてから今日は八日目である。私の心は先生の追憶に充ちてゐる。併し私の亂れた頭はたゞ一つの糸をも確かに手繰り出すことが出来ない。私は夜更くるまで此處に茫然と火鉢の火を見まもつてゐた。

昨日私は先生に就て筆を執る事を約した。その時の氣持では、先生を思ひ出す毎に涙ぐんでゐる此頃の自分にとつて、先生の人格や藝術を論ずるのがせめてもの心やりである様に思へたのであつた。併し今日になつて見ると私は自分の心があまりに落ちついてゐないのに驚く。何を論ずるのだ。今此處で追憶の涙なしに先生の人格を思ふことが出来るのか。殊に先生の藝術に就ては、今新らしく讀みかへしてゐる暇がない。數多い製作の或者は臆ろな記憶の霞のかなたに殆んど影を失ひかゝつてゐる。或者は

ただ少年時の感激によつてのみ記憶され、或者は幾年かの時日によつて印象を鈍らされてゐる。それでは先生の藝術を云爲することが出来るのか。——私は敢て筆を執らうとする自分の無謀にも驚かざるを得ない。しかも今私は二三の事を書きたい衝動に驅られ初めた。私は斷片的になる危険を冒して一氣に書き続けやうと思ふ。(もう直ぐに先生の死後九日目が初まる。田舎の事とてあたりは地の底に沈んで行くやうに静かである。あ、遙かに法鼓の音が聞えて来る。あの海邊の大きな寺でも信心深い人々がこの夜を徹しやうとしてゐるのだ。)

先生の追懐に胸を充たされながらなほ靜かに考をまとめる事の出来ないのは、たゞ先生の死を悲しむためばかりでない。餘計な事ではあるがこゝにもう一つの理由を附け加へる事を許して頂きたい。私は心からの涙に浸された先生の死のあとにそれとは相反な惨ましい死を迎へる筈であつた。しかし先生の死の光景は私を興奮させた。私は過激な言葉を以て反對者を責め家族の苦しみを冒して、とう／＼今日の正午に瀕死

の病人を包みくるんだ幾重かの嘘を切つて落す事に成功した。肉體の苦しみよりも寧ろ虚偽と不誠實との刺戟に苦しみ陥いてゐた病人が、その瞬間に宿命を覺悟し、心の平靜と清朗とを取り返すのを見た時、私の心はいかに異様な感情に慄えたらう。……私は感謝し喜び、さうして初めてまじり氣のない感情でしみ／＼と病人を悲しみ傷んだ。生と死の嚴肅さが今日から病室を支配し初めた。夜が明ければ私は何を措いても死んで行く者を慰めるために出掛けなければならない。——私は落ちついて先生を論ずるよりも、反つてこの方が先生に對する感謝を現はすに適してゐる事を感じる。

——私は頭が亂れてゐる。書出しからしてもう主題にふさはしくない。

二

偶然であるか必然であるかは私は知らない、とに角私は先生の死に就て奇妙な現象を見た。この秋私は幾度か先生を訪ねやうとして果さず、殆んど三月振りで十一月廿三日に先生を訪ねた。その日はいゝ天氣だったので、Aと共に戸山ヶ原を散歩して早

稻田まで行つた。Aは仕事がいそがしいため先生の所へは寄らない筈であつた。私は一所に行きたいと云つていろいろ押問答しながら歩いた。突然Aは一所に行かうと云ひ出した。それから十分程で先生の所に着いた。すると丁度十分程前に先生が最初に血を吐かれた所であつた。

私たちは何かの手傳ひでも出来れば結構と思つて上る事にした。座敷に通つてからふと床の間を見ると、床柱にかゝつた鼻まがりの天狗の面が掛物の上に横面黒像を映してゐる。珍らしい面だと思つて床柱を見たが、そこにはそんなに大きな面は掛つてゐない。では小さい面が光の具合で大きく映つたのかしらと床柱の側まで行つて見ると、そこに掛つてゐるのはたゞ羽團扇と圓い團扇だけであつた。併し影は恰好から、釣合から、どうしても本當の面としか見えなかつた。あまりうまく出来てゐるのでその面が奇妙に氣に掛り、あとで悪かつたと感じたほど執拗にその面を問題にした。この出来事がひどく氣になつてゐたゞけに、臨終の日「死面」といふ言葉を聞いた時、

私は異様な感じに胸を打たれた。本當に悪い辻占であつた。鼻の曲つてゐたことも。

私が先生に初めて紹介された日にも奇妙な事があつた。十八の正月に「倫敦塔」を讀んで以來書きたかつた手紙を、私は二十五の秋にやつと先生に宛て、書いて、それを郵便箱に投げ入れてから芝居に行つた。私の胸にはまだその手紙を書いた時の興奮が残つてゐた。その時に廟下で先生に紹介された。それまで曾て芝居や音樂會で先生を見かけた事のなかつた私が、その日特に芝居で先生と落合はなければならなかつたのは私にひどく不思議に思へた。少くとも私だけにはその日がただの日ではないやうに見えた。

三

先生を高等學校の廊下で毎日のやうに見た頃は、たゞ峻嚴な近寄り難い感じがした。友人たちと夕方の散歩によく先生の千駄木の家に行つたが、中へはいつて行く勇氣はどうしても出なかつた。併し先生に紹介された時の印象はまるで反對であつた。先生

は優しく人を吸ひつける様であつた。さうしてこの印象は最後まで續いた。私は如何に峻厳な先生の表情に接する時にも、先生の温情を感じないではゐられなかつた。

私が先生を近寄り難く感じた心理は今でも無理とは思はない。私は現在同じ心理を、自分の敬愛する××先生に對して経験してゐる。それは恐らく自分の怯懦から出るであらう。併しこの怯懦は相手が恰も良心の如く、自分に働きかけて来るから起るのである。その前に出た時自分の弱點と卑しさを恥ぢないでゐられない故に起るのである。私は夏目先生が氣難かしい疝癪持であることを知つてゐた。もとよりそれは單なる「我儘」ではない。總て自己の道義的氣質に抵觸するものに對する本能的な氣短かい怒りである。従つて、自己の確かでない感傷的な青年であつた私は、自分が道義的にフラフラしてゐる故を以て無意識に先生を恐れた。さうして先生の方へ積極的に進んで行く代りに、先生の冷さを感じてゐた。かう云ふ感じを抱いた者は恐らく私一人ではなかつたらうと思ふ。

この事實を先生の方から見ればどうなるか。私はそれを明かにするために先生の手紙の一節を引く。

「……私は進んで人になついたり又人になつたりする性の人間ではないやうです。若い時はそんな舉動も敢てしたかも知れませんが、今は殆んどありません。好きな人があつてもこちらから求めて出るやうな事は全くありません。……然し今の私だつて冷淡な人間ではありません。……」

「私が高等學校にゐた時分は世間全體が癩に障つてたまりませんでした。その爲めにかつたを滅茶苦茶に破壊してしまひました。だから私も好かれて貰ひたく思ひませんでした。私は高等學校で教へてゐる間たゞの一時間も學生から敬愛を受けて然るべき教師の態度を有つてゐたといふ自覺はありませんでした。……けれども冷淡な人間では決してなかつたのです。冷淡な人間ならあゝ疝癪は起しません。」

「私は今道に入らうと心掛けてゐます。たとひ漠然たる言葉にせよ、道に入らうと心

掛けるものは冷淡ではありません。冷淡で道に入れるものはありません。」
 それは先生の前に怯懦を去つた時直ちに解つたことであつた。先生は寧ろ情熱と感情の過冗に苦しむ人である。相手の心の動きを感じ過ぎるために苦しむ人である。廻りに於て絶対の融合を欲しながら、それを不可能にする種々な心の影に對してあまりに眼の届き過ぎる人である。そのため先生の平生にはなるべく感動を超越しやうとする努力があつた。先生は相手の心の純不純をかなり鋭く直覺する。さうして相手の心を細かい隅々に亘つて感得する。先生の心臓は活潑にそれに反應するが、併し先生はそれだけを露骨に發表することを好まなかつた。先生は親切を蔭する、さうして顔を合せた時にその親切に就いて言及せられることを欲しない。先生にとつては、最も重大なことはたゞ黙々の内に、瞳と瞳との一瞬の交叉の内に通せらるべきであつた。従つて先生は對話の場合かなり無遠慮に露骨に突込んで來るに關はらず、問題が自分なり相手なりの深味に觸れて來ると、直ぐに言葉を轉じて了ふ。さうして手觸りのい、

諧諷を以て柔かくその問題を包む。(勿論心の問題でもそれが個人的關係に即してではなく一つの人生觀思想問題としてならば、先生は底までも突込んで行くことを辭せなかつた。)これらの所に先生の温情と厭世觀との結合した現はれがあつたやうである。右のやうな先生の傾向のために、諧諷は先生の感情表現の方法として欠くべからざるものであつた。先生の諧諷には常に意味深いものが隠されてゐる。熱情、愛、痛苦、憤怒など先生の露骨に現はすことを好まないものが。さうして人々は談笑の間に黙々としてこの中心の重大な意味を受取るのである。先生がその愛する者に對する愛の發表は主にこれであつた。(私の考ではこれが「諧諷」の眞の意味である。従つて眞に貴い諧諷は「痛苦」から、「悩み過ぎる人」から、「厭世的な心持」から、人生に「快活」をもちたらしやうとする愛の徵證として産れるのである。さうでないものは單に浮薄なる心の徴候に過ぎぬ。)

四

——先生は「人間」を愛した。併し不正なるもの不純なるものに對しては毫も假借する所がなかつた。その意味で先生の愛には「私」がなかつた。私はこゝに先生の人格の重心があるのではないかと思ふ。

正義に對する情熱、愛より「私」を去らうとする努力、——これを他にして先生の人格は考へられない。愛のうち自然的に最も強く存在する自愛に對しても、先生は「私」を許さなかつた。そのために自己に對する不斷の注意と警戒とを怠らなかつた先生は、人間性の重大な暗黒面——利己主義——の鋭利な心理觀察者として我々の前に現はれた。

先生にとつては「正しくあること」は「愛すること」よりも重いのである。私は曾て先生に向つて、愛する者の惡を心から憐れみ愛を以てその惡を救ひ得る程愛を強くしたい、愛する者には欺かれてもいい、といふ程の大きい氣持になりたいと云つた事があつた。その時先生は、さういふ愛は最負だ、私はどんな場合でも不正は許さなくて

はゐられないと云はれた。即ち先生の考では、いかなる愛を以てしても不正を許すことは「私」なのである。たとへ自分の愛子であらうとも、不正を行つた點に就ては、最も憎んでゐる人間と何の擇ぶ所もない。自分の最も愛するものであるが故に不正を許すのは、畢竟イゴイズムである。

先生は自分の子供に對しても偏愛を非常に恐れた。親の愛は平等であるべきだ。もしそれを二三にする位なら寧ろ平等に愛しない方がいゝ。この事は不斷に嚴密な自己省察を必要とするのであるが、先生はこの點に就いて非常に注意を拂つてゐた。さうしてこの心掛がやがて人生全體に對して公平無私であらうとする先生の努力となつて現はれた。

五

先生が偏屈な奇行家として世間から認められてゐるのは、右のやうな努力の結果である。最負眼なしに正直に云つて、先生はど常識に富んだ人間通は滅多にない。また

先生ほど人間のなすべき當然の行を尋常に行つてゐた人も稀である。たゞ先生はその正義の情熱のためは、信する所をまげざる事が出来なかつた。徳義的背骨があまりにも固かつた。それが卑屈と妥協と中途半端とに慣れた世間の眼に珍らしく見えたまでである。

併し常識的といふ事が道義的鈍感を意味するならば、先生は常識的ではなかつた。先生はいかなる場合にも第一義のものを誤魔化して通る事が出来なかつた。たとへ世間が普通の事と認めてゐるやうとも、とにかく虚偽や虚禮である以上は、先生はひどくそれを嫌つた。先生の重んずるのはたゞ道徳的心情である。形式習慣に無暗と反抗するのではなく、たゞ道徳的心情より出でてのみ動かうとしたのである。これを奇行と呼び偏屈と嘲けるのは、世間の道義的水準の低さを思はせるばかりで、世間の名譽にはならない。

先生の博士問題の如きも、これを「奇を衒ふ」として非難するのは、あまりに自己

の卑しい心事を以て他を付度し過ぎると思ふ。先生は博士制度が世間的にも又學界の爲めにも非常に多くの弊害を伴ふ事實に對して怒を感じた。その内にひそむ虚偽、不公平、私情などに對して正義の情熱の燃え上るのを禁じ得なかつた。これは先生として當然な事である。「博士」は多くの場合に對世間的な根の淺い名譽の案山子である。博士であるか否かに關はらず學者の價値はその仕事の價値によつてのみ定まる。しかも世間は「博士」が大きい仕事の標徴であるかの如くに考へてゐる。そこに不正と虚偽がある。この點に就いては恐らく眞に眞理の爲に努力する學者たちは先生の態度を是認しないでゐられないだらう。

六

徳義的背骨のあるものには四周から煩さい事苦しい事が集まつて来る。先生はそのために絶えず疝癪を起さなければならなかつた。しかも先生はその敏感と情熱とのために、更に内からその苦しみを強くしなければならなかつた。先生の痛情はこの痛苦

の對策として現はれた傾向である。

先生の超脱の要求は、(非人情への努力は、) 痛苦の過多に苦しむ者のみが解し得る心持である。我々は非人情を呼ぶ聲の裏に溢れ過ぎる人情のある事を忘れてはならない。娘がめつちかちになつて自分の前に出て來ても、ウンさうかと云つて平氣でゐられるやうになりたい、といふ言葉の奥には、熱し過ぎた親の愛が渦巻いてゐるのである。超脱の要求は現實よりの逃避ではなくて現實の征服を目ざしてゐる。現實の外に夢を築かうとするのではなくて現實の底に徹する力強いたじろがない態度を獲得しやうとするのである。先生の人格が昇つて行く道はこゝにあつた。公正の情熱によつて「私」を去らうとする努力の傍には、超脱の要求によつて「天」に即かうとする熱望があるのであつた。

七

先生の諧謔はこの超脱の要求と結びつけて考へねばならぬ。もともと先生の氣質に

は諧謔的な傾向が(江戸ッ兒らしく)存在してゐたかも知れない。しかし先生は諧謔を以て總てを片付けやうとする人ではなかつた。諧謔の裏には絶えず厭世的な暗い中心の嚴肅がひそんでゐた。先生が單に好謔家として世間に通用してゐるのは、たまたま世間の不理解を現はすに過ぎないのである。我々は先生の人格が諧謔を通じて柔かく現はれるのを見る時、寧ろ一種の貴さを感じないではゐられなかつた。そこには好謔家といふ觀念にあてはまる何物をも認める事が出来ない。

八

先生の藝術はかくの如き人格の表現である。

先生は自己の人格の内から様々な人物や世界を造り出した。この造り出し方に於て私は先生の藝術の一特長を注意したいと思ふ。

先生は眼の作家であるよりも心の作家であつた。畫家であるよりも心理家であつた。見る人であるよりも考へる人であつた。小説家であるよりも寧ろ哲人に近かつた。

のためか、先生の作物に寫實味の乏しいことは、左程氣にならない。(しかしドストイェフスキイが自分を寫實主義者と呼んだ意味でならば、先生もまた寫實主義者である。)

私は先生の藝術に著しいイデエを認める。一の作物の結構は凡てそのイデエから出てゐるやうに思ふ。この意味で先生の作物はかなり「作られた」といふ感じの強いものである。しかしその感じはイデエの力強さの下に直ぐ消えて行く。さうして我々は赤裸々な先生の心と向き合つて立つことになる。

我々は先生の作物から單なる人生の報告を聞くのではない。一人の求道者の人間知と内的經路との告白を聞くのである。

九

利己主義と正義及びこの兩者の争は先生が最も力を入れて取扱つた問題であつた。「猫」は先生の全創作中最も露骨に情熱を現はしたものである。それだけにまた濃厚

な諸諒を以て全體を包まなければならなかつた。この作は恐らく先生の全生涯中最も道徳的痼癩の猛烈であつた時代に書かれたものであらう。念入りに重ねられた諸諒の衣の下からは、世間の利己主義の不正に對する火のやうな憤怒と、徳義的背骨を持つた人間に對する溢れるやうな同情とがのぞいてゐる。しかしこの時にはなほ問題が先生自身の内生に喰ひ入つてはゐなかつた。その後の諸作は漸次問題が内に深まつて行く經路を示してゐる。さうして最後の「明暗」に至つて憤怒は殆んど憐愍に近づき、同情は殆んど全人間に平等に行き亘らうとしてゐる。顧みてこの十三年の開展を思ふとき、先生も遙かな道を歩いて來たものだと思ふ。

その經路を概観して見ると「猫」の次に「野分」に於て正義の情熱の露骨な表現があつた。「虞美人草」に至つては鮮やかな類型的描寫によつて、卑屈な利己主義や、征服欲の盛んな我欲や、正義の情熱や、厭世的なあきらめなどの心理を剔抉した。その後の諸作に於ても絶えずこの問題に觸れてはゐたが、それを著しく深めて描いたのは

「心」である。この作に於ては利己主義は遂に純然たる自己内生の問題として取扱はれてゐる。私は利己主義の悪醜さをかくまで力強く鮮明に描いた作を他に知らない。また執拗な利己主義を窒息させなければ止まない正義の重壓の氣味悪い底力も、前者ほど突込んではないが、(特に重大な所にギャップはあるが)、力を入れて描いてある。次の「道草」に於ても利己主義は自己の問題として愛との對決を迫られてゐる。この作で特に目につくのは、主人公の我がいかに頑固に骨に喰ひ入つてゐるかをその生ひ立ちによつて明かにしたこと、夫や妻やその他の人々の利己主義を平等に憎んでゐること、その利己主義を打ち砕くべき場合方法などを繰り返しく暗示してゐること、結局それがだんだん實現されさうになつて行くといふ幾分光明のある結末が先生の作として極めて珍らしいことなどである。この作は明かに次で現はれた「明暗」の前提をなしてゐる。「明暗」に於ては利己主義の描寫が辛辣を極めてゐるに關はらず、作者は各人物を平等に憐れみ勞はつてゐる。さうして天真な心による利己主義の征服を暗示す

るのみならず、一步一步その征服の實現に近寄つて行つた。(先生はそれを解決しなかつた。しかし或は——自らの全存在を以て解決したのではないのか。)

10

戀愛と正義の葛藤、利己主義による戀愛の悲劇なども、先生が熱心に押しつめて行つた問題であつた。こゝに先生の人生に對する厭世的な氣分が現はれてゐる。戀愛は人生の中核をなすものであるが、しかしそれは正しく生きることに抵觸しはしないか。また戀愛のある所に必ず幸福な心の融合があるといふ事は可能であらうか。人と人との間には掛ける橋がないといふ言葉は眞實ではなからうか。

「三四郎」「それから」「門」「彼岸過迄」「行人」などが右の題目の開展であることは明かである。「三四郎」に芽ざして「それから」に極度まで高まつた戀愛の不可抗の力は、遂に正義を押し倒した。作者はこの事を可能ならしめるために享樂主義者を主人公とした。しかし不可抗の力の強さを際立たしめるためには、あらゆる同情を不義の戀に

落ちて行く男女の上に注ぐ事をも辭しなかつた。「門」はその解決である。男女の相愛はこれほど深まる事が出来る。しかし押し倒された正義は執拗に愛する者の胸を噛んでゐる。完全に相愛する男女の生活にも惨しい寂しさがある。さうして遂に正義は蛇のやうに謀反者の喉に巻きつく。

「彼岸過迄」に於ては愛を双方で認めながら心も體も近づく事の出来ない宿命的な悲劇が描かれてゐる。更に「行人」は夫婦の間でどうしても心を觸れ合せることの出来ない愛の悲劇を描いてゐる。愛は遂に絶望である。

この問題に就ても「道草」は一つの活路を暗示する。碎かれた心のみが愛を生かせるのである。「明暗」に至つてそれは正面から取扱はれた。「私」を去れ。裸になれ。そこに愛が生きる。その他に愛の窒息を救ふ道はない。

一一

先生の厭世的な氣分は戀愛を取扱ふ態度に充分現はれてゐる。しかしそれが更に明

かに現はれてゐるのは生死の問題に就てである。こゝに先生自身の超脱への道があつたやうに思ふ。

元來先生は輕々しく解決や徹底や統一を説く者に對して反感を持つてゐた。人生の事はさう容易に片附くものでない。頭では片づくだらうが、事實は片附かない。——しかしこれは片附ける事自身に對する反感ではなくて、人生の矛盾や撞着をあまりに手輕に考へる事に對する反感である。先生は望ましくない種々の事實のどうにも出来ない根強さを見た。さうしてそのため苦しみ続いた後、厭世的な「あきらめ」に達した。顧みて口先ばかり景氣のいゝ徹底家の言葉に注意を向けると、思はずその内容の空虚を感じないではゐられないのである。

けれども「あきらめ」に達した故を以て先生は人生の矛盾不調和から眼をそむいたわけではなかつた。先生はますます執拗にその矛盾不調和を凝視しなければならなかつた。寂しく悲しく苦しかつたに相違ない。(たとへ種々の點で所謂徹底家よりも「あき

らめ」に沈んだ先生の方が遙かに徹底してゐたとは云へ。）

それ故先生は「生」を謳歌しなかつた。生きてゐる事は致方のない事實である。望ましいことでも望むべき事でもない。たゞ併し生きてゐる以上は本能的な生への執着がある、しなければならぬ事、則らなければならぬ法則もある。それは苦しいかも知れない、苦しくても止むを得ない。——抑も生きる事が苦しむ事なのである。生きてゐる以上は種々の日常の不快事を（他人の不正や自分自身の不完全や好ましくない運命やを）避ける事が出来ぬ。寧ろそれらの不快事が生きてゐる事の證據である。人生とはもどく／＼かくの如きものに他ならなかつた。

併し先生は「死」を「生」より尊しとしながらも、「死」を謳歌しなかつた。死も亦致方のない「事實」として存在する。それは瞑想する自分には望ましい事實であるが、本能的には恐ろしい。強て死を求めるのは不自然である。けれども死が人間の運命だといふ事は人間の不幸ではない。従つて死んでもいゝし死ななくてもいゝ、生きてゐても

いゝし、生きてゐなくてもいゝ。

このやうな生死に對する無頓着が先生のはいつて行かうとした世界であつた。先生はそこに到着するまでの種々の心持を製作の内に現はしてゐる。「門」「彼岸過迄」「行人」「心」などはその著しいものである。こゝにも開展のあとを認められる。「心」に於て極度まで押しつめられた生死の問題は、右の無頓着が著しくなるにつれて、一種透徹な趣を帯びながら、靜かに心の底に沈んだ。「硝子戸の中」がその消息を語つてゐる。

二二

併し人生觀の如何に關はらず、先生の内の「作家」は先生を驅使して常人以上に「生かせ」働かせた。殊に生死に對する無頓着は反つてこの作家を強健ならしめたやうに見える。「明暗」を書いてゐた先生は或時「毎日すべつたのころんだのとクダラない事を書いてゐるのは、實際やり切れないね。」と云つた。實際かう感じる事もあつたに相違ないだらう。而も先生は渾身の力を注いで製作しないではゐられなかつた。さう

して藝術的勢力その者が先生の心を満足させた。炎熱の烈しかったこの暑中も、毎日「明暗」を書きつづけながら、製作の活動それ自身を非常に愉快に感じてゐた。そのため生理的にも今迄になく快適を感じてゐたらしかつた。(その實は製作の興奮のため徐々に身體を疲勞させたのであつたらうけれど。)

先生が製作によつて生の煩はしさを超脱する心持は、私の記憶では「草枕」や「道草」などに描かれてゐたと思ふ。

一三

私は極めて概括的な、そのくせバラ／＼になつた觀察を書いた。もと／＼先生の藝術に就て適切な評論をなし得やうとは思つてゐなかつたから、これ位で筆を擱きたい。先生の藝術に就てはなほ論すべき事が多い。私は先生が「何を描かうとしたか」に就て粗雑な手を一寸觸れたのみで、「如何に描いたか」の問題には全然觸れなかつた。そこへはいればとても容易に出られないと思つたからである。それに、私の今の心持

は、たゞひたすら先生の人格に引きつけられてゐる。先生の技能が提供するさまざまの興味ある問題は、たゞへその興味が非常に深からうとも、今直ちに私の心の中心へ來る事が出來ない。併しそのために讀者諸君の注意をこの方向へ向けて悪いといふわけは少しもない。私は先生の死に際して諸君が先生の全著書を「まごめにして更めて鑑賞されんことを希望する。さうしてこゝに説いたやうな先生の人格と生活との表現がいかなる姿とリズムによつて行はれてゐるかを仔細に檢せられむことを勸告する。先生の藝術はその結構から云へば建築である。總ての細部は全體を統一する力に服屬せしめられてゐる。更にまた先生の全著書は先生の歩いた道の標柱である。總ての作は中心を流れるいのちに従つて並べられてゐる。これらの物に親しむのはいかなる意味に於ても我々を益し我々を幸福にするだらう。

一〇 人間の心理には

人間の心理には自分の内に横はる恐ろしい事實を出来るだけ見ないでゐたいといふ傾動がある。これが最も明かに動くのは、希望と勇氣に輝いてゐる自分の眼の前に、突然、見るを欲せぬ暗い事實が宿命的な物凄さを以て現はれ出でた瞬間である。いかに勇氣のある人でもこの咄嗟の瞬間には思はず眼をそむけようとする。心弱いものは眼をそむけたきり元に歸へすことが出来ない。併したとへ人間の心理一般に通ずる衝動であるにしても、それを處置する態度の相違は、人格の價值を全然異ならしめる程に重大である。そこに人格の強さ貴さの程度がハッキリと現はれる。人は恐らくこの點に於て眞の勇敢と怯懦との意義を見出し得るだらう。

或人々は恐ろしいものから絶対に逃げやうとする。彼の欲するのは眞實でなくて虚偽である。たゞ自分の心を安める事さへ出来れば、何を掴んでも關はないつもりになつてゐる。従つて恐ろしい眞實を暗示する總てのものに敵意を持ち、その眞實を覆ひ隠さうとする總てのものに媚びられる——こゝに眞の怯懦がある。生活よりの逃避がある。

また或人々はたとへ一度眼をそらせても直ぐに又その恐ろしい物を見返らないではゐられない。彼は魔物に魅せられたやうに眞實に引きつけられる。さうしてその眞實の故に彼は衰弱する。併も彼は眞實から眼を放すことが出来ない。——こゝには確かに勇氣がある。たゞこの勇氣によつて自分を高めて行く力が足りないのである。

眞に勇氣あり力ある者は、恐ろしい眞實を見つめると共にそれに堪へる道を知つてゐる。さうして更に、恐ろしいものと戦ひそれに打ち克つて自分の生を高めるために、若い獅子のやうに努力する。これこそ我らの望む態度であり、また我らの到達しなければならぬ境地である。

二

我々は眞の勇氣と力とを獲得する爲に努力する。自分の内の怯懦と無力とを殘酷な程に卑しめる。併し人が恐ろしい物より眼をそむけて虚偽を求めてゐるのに接した時、我々はいかに振舞はなければならぬか。

虚偽を欲する人に向つてその意の儘に虚偽を與へることは、怯懦の醜さを感じない人へのみ自然に自由に樂々と行はれる。併し怯懦を卑しめる者はいかに相手の苦しみに同情しても自敬の念をいくらか傷けることなしに虚偽を與へる事は出来ない。我々は虚偽を憎む。眞實を相手の胸に注ぎ入りたい衝動を感じる。たゞ相手から幻影をもち取つた時の相手の苦しみを思ふ時、思はず自己の人格の命する所を差控へたくなるだけである。従つて此際の我々の同情は(同苦は)相手の苦しみを自分の胸に感ずるばかりでなく相手の苦しめない苦しみ(怯懦を見る不愉快、虚偽を助ける不愉快)をも感じなければならぬ。同情(同苦)が同情される人の苦しみよりも烈しいとはこの様な場

合を云ふのである。同情の危険を説く根據はこゝにある。我々は右のやうな同情によつてあまりに多く自己を引下げる危険を警戒しなくてはならぬ。

我々は出来るならば虚偽を欲する心を蹂みにじつて眞實を目の前に突きつけたい。それは本當の意味で親切である。併しそのため相手がひどく苦しむのを知つてゐる際に、我々は思ひ切つてそれを敢行し得るか。そこには或程度の冷酷が必要である。我々は敢て冷酷であることが出来るか。——我々はなほ誰にでもそれをなし得るほど力強くない。併し相手から虚偽をもぎ取ると共にその苦しみに打ち克つ勇氣を與へ得る場合には、(それは)我々が愛と力を注ぎ得る相手に對しては、(我々は充分冷酷である)ことも出来るのである。

三

眞實を見つめるために衰弱する人に對しては、我々は心からの同情を注ぐ。この種の人は虚偽によつて慰めやうとすべきでない。併しまた彼ら自身の認めてゐる恐ろし

いものを、側から突つく様なことをしてもいけない。我々はたゞ彼らを勞いたはり、しみじみした氣持で力づけるべきである。彼らがその恐ろしいものに打ち克つて、高い力強い生を掴み得るやうに。

我々は恐ろしい眞實に對して勇ましく戦ふ人に接する時、自由な悦ばしい氣分を味ふ。我々はこの種の人と心から共に喜び共に悲しむことが出来る。これこそ眞に蒼空の如く透明な同情である。

一一 懷疑と信仰

私はこゝにたゞ懷疑と信仰との心理を語らうとしてゐる。たとへ幾何か會得する所があつたにしても私はまだ「眞理」を悟つたとは云へない。私は道を説く權威を十分に力強く自分の内に感ずるまで、人に説くといふ如き事をつゝしみたいと思つてゐる。私の試みる所は、あくまでも、峻しい道程を辿る者の貧しい體驗の告白である。

私は近頃一つの機縁に逢着した。さうしてまた一つの自分の眼があいたことを經驗した。自分ではそれが非常に嬉しい。しかしその機縁となつた出來事は、要するに、恥づべき自己の混亂迷惑に過ぎないのである。一晝夜の間私は性格を奪はれ理知を奪はれ、自己その者をさへも奪はれかゝつてゐた。私の精神は恰も泥酔したものの肉體のやうに意久地がなかつた。けれどもその惑亂は幸にも無駄ではなかつた。再び自分

の足で大地を踏みしめた時には、私は曾て經驗しなかつたほど強く自分の性格を、自分の理知を、さうして自己の力を感じたのであつた。さうして今更のやうに自己の内の「生」に對して驚異しないではゐられないのであつた。これが人間の内の「生」である。萬人を生かしてゐる「生」である。何といふ素晴らしいことだらう。しかも人間はさうしてこのやうにその「生」に對して盲目であり得るのか。彼等は殆んどこの無上の寶を所持することを意識してゐない。さうしてたゞあつてもなくともいふやうな些細なものにその全身の力を集注してゐる……しかしそれは他人ごとではなかつた。自分もまた確かにその一人に相違なかつた。恐ろしいことだ、身慄ひの出るやうに恐ろしいことだ。かうその時に私は感じた。さうして私の心は熱い感謝に充たされた。

私はその機縁を與へた人が貴い心情の持主でなかつたからと云つて、その人に對する私の感謝を差控へやうとは思はない。たとへそれが詐欺師であらうと乞食であらうと私の感謝に變りはない。私はたゞそこに私の内のものを觸發した或大きい手の現は

れを感ずるばかりである。乾いた藁の積まれた所では一本のマッチもよく大きな焰をつくる事が出来る。たとへその焰が前から藁の内にひそんでゐたにしても、それが現はれ得るためには小さいマッチの火の恩を被らなくてはならないのであつた。しかしながら我々は、内に何事かを積み上げてゐる際に、それを觸發する力が如何なる形に現はれて来るかを豫め推知することはできない。従つて我々は周圍に迫るあらゆる出來事に對して鋭敏な觸角を働らかせてゐなくてはならぬ。昔アツシシの市の郊外で禮拜堂の司祭が、その日課である福音書の或個所を讀んでゐた。その時司祭の胸には野心と貪欲と姦淫の心が渦巻いてゐたかも知れなかつた。しかしその司祭の聲によつて傳へられた福音の言葉が、アツシシの富める商人の息子フランチェスコに與へた激動は、おほよそ人間の心に根を張り得る最も強い欲望をも打ち碎き得る程のものであつた。かくの如きことがこの平凡な司祭の聲によつて起り得ることを誰が豫期し得たであらう。それはたゞ天與の機縁である。それを逸しなかつたのはフランチェスコ

の觸角が鋭敏だつたからである。——我々はその物の卑しさの故にその内にひそむ機縁を逸してはならない。機縁となり得る點より云へばいかに卑しい者も感謝に價するのである。——まことに彼には貴い心情がなかつた。併し彼は太古の人間のやうな力強さを持つてゐた。彼の心には現代の青年に共通なあの「迷ひ」が微塵もなかつた。彼は一本の突き徹る烈しい方を以て易々と他人の人格を征服し得た。たと「貴い心情」がないといふことを他にしては、(云ひ換へれば彼が釋迦や基督の意味に於ける宗教家でないといふ事を他にしては)、彼もまた一種の「人」である。彼がその力強さを以て釋迦の道破した眞理を語る時には、たとへ彼が眞實にその眞理を會得してゐないにしても、なほ釋迦の言葉に一種の熱と力とを與へ得るのである。彼は恐らく多くの人を、彼の一風變つた猛烈な樂欲の犠牲として、一層深い迷ひの淵に追ひ入れ。だらう。しかもなほ同時に、鋭敏な觸角を有する多くの人々に對しては、無上に貴い暗示と刺戟とを與へ得るだらう。この意味に於て彼は惡魔の使徒であると同時に神の使徒である。

私は手綱を控へ／＼書いてゐる。しかも遂に自分を聖フランチェスコに比するかのやうな不遜に陥つた。私は顧みてたゞ苦笑するばかりである。なるほど私には一つの眼が開いた。私の心は歡喜に溢れてゐる。しかしその開いた眼が時折ふさがつて、無條件に元の盲目に歸る瞬間のあることを、明らかには私は知つてゐるのである。いかなる意味に於ても私は自分が新しい境地へ身を以て躍りこんで行つた、とは云ひ得ない。あくまでもたゞ私の眼が、時折ふさがらなければならぬ程度に開いたに過ぎないのである。これをかの全然たる生活の革命に比する時、私は自分の行先のまだく遙かなことを嘆じないではゐられない。ドストイェフスキイの描いた聖僧グシマの回心などに思ひ到ると、寧ろ私は自分の貧血的な辿り方を呪ひたくなる。(しかし新しき誕生への準備は、反撥の形であると吸引の形であることを問はず、兎に角徐々に成就せらるゝものである。たとへそれがあまりにも徐々過ぎる歩みであつても、歩みである以上何かの意義を持つに相違ない。私はさう思つて自分を慰めてゐる。)

要するに私は、「かうあればいゝのだ、またかうなくてはならないのだ」といふ一つの境地を見たのである。そこへはいつたのではなくて、たゞ垣間見たのである。さうしてたゞそれを見た者として、自分の心持を語らうとするのである。

二

私はまづ我々が「生活」「生命」或は「生」と呼ぶ所の我々に最も直接な問題から出發する。

一體この「生活」といふ言葉はどいろ／＼な意味に、また曖昧に、使はれてゐる言葉はない。我々は朝起きて顔を洗つて飯を食ふ、これも生活である。我々は人に逢つて或仕事或取引の交渉をする、これも生活である。我々は或人の病氣を見舞ふ、或は女の側へ行つて酒を飲む、これも生活である。或はまた、我々の食つたものが胃のなかで消化し、呼吸が不斷につゞき、心臓が活潑に動いてゐる、それ故に我々は生きてゐるといふ。——またこれらに對して、我々の思想的活動や、美的感動や、道徳的反省

などは一層貴い生活——精神生活——であると云はれてゐる。さうしてそこに生活の意義に關する永久的な争論が生み出される。

しかし要するに「生」は我々の内にあるのである。我々は自ら直接にそれを體驗することが出来る。さうして我々の最も直接に體驗する所は、たゞ不斷に流動して休むことのない活動である。力である。我々はそれ以外の何物をも見出さない。そこにはまた分裂もなければ問題もない。恐らく「生」本來の姿である所の、無一物にして、しかも萬物を包容する生々たる或物があるのみである。

けれどもこの生々たる或物が「生」その者である事を感じただけでは、まだ何事も起らない。多くの人はいか／＼の如き學説を幾度か聞いたであらう。さうして自らその學説の指し示す通りに感じたであらう。しかもその多くの人には何事も起らなかつた。——何事が起るためには、この或物に對する滿腔の驚異が必要である。この或物に含まれた無限の深さ、恐ろしさ、歎ばしさ、強さ、偉大さ、充實さなどに壓倒せられる

事が必要である。何故に、いかにして、かくの如きことが起るかば、説明し得べきでない。たゞ實際に、事實として、かくの如き驚異が突發する。さうしてこの驚異の後にのみ、生々たる或物の無限の意義が人の胸に湧き立つて來るのである。

この時「生」はもはや我々一己の生ではなくして、「生」そのものである。我々はそれを自分のものとして感じるよりも、寧ろ自分に與へられたもの、或は自分に宿つたものとして感じる。この心理から恐らく人格的な神を尊崇する感情が生れたのであらう。實際我々は生のいみじさを感じることに、一すぢの髪だに白くし黒くすることの出来ない自己の無力を嘆じないではゐられない。さうして「生」の力が自分の内に實現する所のものを總て大いなる手の働らきとして受取らざるを得ない。

三

まことに「生」はその深さを感じる者にとつては無限に深い。しかしそれを感じないものにとつては、極めて平凡な、殆んど注意をひくにも足りない、家常茶飯事である。

この感じ方の相違はやがて人生の評価全體の相違を引き起す。前者が熱情と興奮を以て守る所の生活は後者によつて冷やかに嘲笑せられ、前者が無頓着に捨て去らうとする榮譽や財寶は後者によつて血の値を以て尊重せられる。かくて全然相反する二種の人間生活が我々の間に可能になるのである。

しかし、生本來の姿を悟ると否とに關はらず、(即ち生本來の面目が喜らし方の上に現はれると否とに關はらず)總ての人の内にこの不斷の活動である所の「生」そのものが存在する事は疑ふ餘地がない。——少くともそれだけの事實を認めて置けば、今試みやうとする懷疑と信仰との心理的考察には充分である。

四

さて我々の「生」の活動は、一般に「意識」の説明に於て繰り返へされてゐる様に、必ず統一的のものである。(もとより統一のある所には反對もあるが、しかし反對がなければ統一はない。)この事は我々が日常の意志活動を見れば最も明らかに現はれてゐる。

る。何等かの目的に統一されない意志活動といふが如きものは、我々には想像だも出
來ないのである。

信仰は我々の「生」に對してこの統一的傾向を高めやうとする心の態度である。云ひ
換へれば、我々の生の活動を一層活潑に強烈にする所の心の態度である。

懷疑はそれに反して我々の「生」に反對と矛盾とを注ぎ込む。一方では統一に對する
刺戟であり、他方では「生」を散亂せしめやうとする危険である。

この二つの心の態度が我々の「生」に對していかに重大な意義と影響とを持つかと、
今こゝに取扱はうとする主要な問題である。

五

そこで先づ私は、懷疑に就ての二三の觀察から始める。

我々青年の多くは懷疑の效績を熟知してゐる。我々の生を自由にしたものはあらゆる
權威に對する懷疑であつた。我々はそれによつて道德の上でも思想の上でも美的詭

賞の上でも我々を外から束縛する如く見える總てのものから絶縁した。我々はもはや
眼をふさがれた奴隷ではない。恰も文藝復興期の新人たちが古い權威に對する謀反人
であつたやうに、我々もまた我々の古い權威に對する謀反人である。さうして彼等
が、新しく綻びた花のやうな新鮮な生活に歡喜した如く、我々もまた我々の未來の多
い生活に歡喜する。

何故に我々は懷疑したか。——それは流動であるべき生の内に流動を妨げる凝固物
を見たからである。例へば我々は石のやうに固くなつた忠孝の概念が重い鎖となつて、
我々の足に引き摺るのを感じた。しかし我々の祖國を愛する情熱と親を愛する情緒と
は、このやうに我々の歩みを妨げなければならぬほど不自然なものではなかつた。
そこで我々はこの概念の内に我々を承服せしむべき正常な權威を見出し得ず、遂にそ
れを我々から投げ捨て、打碎いた。このやうな例は人間の自然を殆んど顧みない、淺
薄な形式的な理想主義の教育を受けた我々にとつて、數へ切れないほどにも多かつた。

かくして懷疑は我々の内に凝固せる總ての物を打ち砕かうとする。さうして我々を自分自身の内から湧き出でる自由な生へ導いて行かうとする。これが我々の生の開展にとつて缺くべからざるものである事は云ふ迄もない。我々は絶えず、我々の内に形を結んだものを、この懷疑の檢察の下に置いて見なくてはいけない。我々の所有する概念も思想も評價も、それが我々の生に影響する力を持つてゐる限り、この檢察を逃れるべきでない。かうして絶えざる打破の次に、常に新しいより強い統一が實現されてこそ、我々の生は活潑に成長するのである。懷疑に於て勇敢なものでなければ勇敢に生きることは出来ない、と云つた哲人の言葉にはまことに永遠の眞理があると云はなくてはならぬ。

六

しかしながらまた我々は懷疑の害毒に就て盲目であつてはならない。懷疑が深く喰ひ入り過ぎて、新しい統一を實現する力の失はれた時、我々の生はみじめにも引き

裂かれる。そこに我々は生の萎微沈滞、更に悪いことには頹廢への誘惑をさへ感ずるのである。

元來、統一ある生が力強く活動し、散亂した生が弱々しく萎縮すると云ふ事は、個人の生活に於ても團體の生活に於ても、極めて普通の事として認められてゐる。しかしその事實が我々の「生」にいかにか深くまで喰ひ込んでゐるかは、わりに注意されてゐないと思ふ。行き過ぎた懷疑は人を神經衰弱にし、その生理的活力一般を鈍らせる。多くの病氣はその眞因を懷疑に持つてゐる。それは殆んど我々の想像を絶する程であるらしい。更に懷疑のひき起す思想的混亂、道德的無秩序、仕事に對する情熱の冷却、生の意義に就ての絶望などが、いかに人間の活動を弱め生を低下させるかは頹廢的傾向を有する人々の生活によつて生々しいほどに實證されてゐる。それは人を自殺に導き、狂氣に誘ひ、或は自暴自棄的な感溺に充ちた生活に引き入れる。そのもたらす所は常に腐敗の臭氣である。

我々はこの事を自分一個の内生に於ても經驗し得ないではない。例へば我々は自己の天才才能などを疑ふ事によつて、或は愛する者の誠實を疑ふ事によつて、身心共に憔悴するのである。また我々は自己の生活力の根強さを疑ふ事によつて、(所謂神經を起すことによつて)屢々自己の活力の緊張をゆるめ、病魔に犯さるゝ隙を造るのである。かくの如き通常の出來事の内にも我々は、生の力がその統一と散亂との状態に従つて著しく強さを殊にするものである事を、さうして懷疑が十の力をも五や三に減衰するものである事を、明瞭に感知し得ると思ふ。我々の時代の最も甚しい病弊は種々の形に現はれた「實を結ばぬ懷疑」である。民衆は何處にその生の意義を見出すべきかに惑ふてゐる。而も彼等を導くべき權威は既に倒されてたゞ形骸を残すのみである。彼等は徒らに絶る。葉にさへも絶る。誰が彼等に確乎たる支柱を與へるのか。

七

迷へるものゝ支柱が「信仰」であることは云ふまでもない。我々は時代の病弊の反映が、雜然たる諸種の信心となつて、我々の目前に混亂してゐるのを見る。

しかし我々の時代の常識は信仰の害惡に就て極めて敏感である。或者は信仰を固定概念として斥ける。或者はそれを現實に對する怯懦として嘲ふ。或者はそれが絶対主義の遺物である故に、また或者はそれが偶像の復活である故に、不斷の改造を必要とする我々の生活には害があるといふ。——かくして神はダアウキンの進化説ほどにも信じられてゐない。

確かに彼等の云ふことは本當である。信仰には正にその通りの害惡がある。そのために文藝復興運動も起らなければならなかつた。しかしそれは主として信仰の内容に關する問題である。生の統一を高めやうとする心の態度としての信仰その者には、何等害惡がある筈がない。

例へばこゝに或野心深い宗教家の神秘的な力を信する女があるとする。この女の眼に映するものはたゞ人間以上の力を所有する貴い聖者である。彼女はこの聖者を通じ

て神秘的な或者を信じてゐる。さうして信仰の前には總てが可能であることを、死者が蘇り山が動くといふことさへも可能であることを信じて疑はない。彼女の胸は幸福に充たされ、彼女の眼は靈の焰の如くに輝く。彼女の生は單の飛ぶが如く統一され、力は烈風の強さを以て内より湧き出でて来る。かくして彼女の情熱は最も冷徹な人間をさへも動かし得るほどの異常な熱を帯びて来る。彼女自身の上に或奇蹟が（例へば病が立ちどころに癒されるといふやうなことが）行はれるのみならず、また彼女自らも自分に近い者の上に同じ奇蹟を行ひ得るやうにさへなる。——總ては野心深い宗教家を信ずる所から出るのである。

この際もしその宗教家が彼女を邪道に導かうとすれば、彼女は易々として導かれて行くであらう。さうして實際この宗教家がそれだけの事をやり兼ねないとするれば、——彼女が信すべきでない者を信じてゐるといふ意味で彼女の信仰は斥けらるべきものである。しかし彼女の生を強烈にした信仰そのものは、（彼女の心からその宗教家を捨

象して後に残る心の態度だけは、）害悪がないばかりでなく極めて貴いものである。我が全力をつくして獲得しなければならぬものである。

かくの如く信仰の内容を捨象してたゞ信仰のみを論ずるのは、一見甚だしく抽象的に感ぜられるかも知れない。しかしこれは決して抽象的ではない。信仰の内容は幾度か變つたが、信じかたは曾て變らなかつた。信仰の貴さ卑しさ、偉大さ矮小さを定めるものは信仰の内容であるが、人に力を與へるものはこの信じかたである。我々が屢聞く言葉に、「たゞ信せよ、神は信する者の胸に自らを現はすだらう、」といふのがある。逆説めいたこの言葉は確かに信仰に就ての眞實を云ひ現はしてゐる。信仰はたゞ懷疑に對立する心の態度である。さうして生の力強い開展のために必ずなくてはならないものである。

八

しかしながら、内容を捨象した信仰を考へることは出来ても、事實にそれを現はす

ことは全然可能でない。人は**或者**を信することによつて初めて信仰を得るのである。彼女の信じかたは眞實であるが、しかしそれはかの宗教家を信するといふ機縁なくしては決して起り得なかつた。この意味で、信仰は必ず懷疑を寄せつけない一つの内容の獲得を伴ふものである。實際、全然内容のない信仰はあり得ず、また内容が打碎かれると共に動搖しない信仰も存在する筈がない。

そこで問題は、生の凝滯窒息を伴はないやうな信仰内容が、いかにして獲らるゝかといふ點に移つて來る。

そのためにはたゞ一つの機縁が必要である。私はこゝで、自己の内の「生」に對する驚異に就て云つたことを想起する。まことに右の如き信仰への機縁となるものは、この「生」の發見である。自己の内にも生そのものゝ存在することを、宇宙の生、萬物の生、神の生、の存在することを、直覺によつて感得することである。

我々の意識は境に應じて不斷に雜念を生起する。衣食住のこと、人との關係、仕事

の屈託、名聞、美色——たゞこれらのことの上のみ我々の多くは生きてゐる。さうして我々の内にある微妙な、絶大な「生」そのものに對しては全然相關する所がない。これ世上の生活である。迷へる衆生の生活である。しかし一度**生**に對する驚異に打たれたものは、(即ち自性を悟つたものは、或は神の力に打たれたものは、)新しく生れて永遠の生への情熱を獲得するのである。彼は第一にその純粹の生を力限り生かさうとする。さうしてその生が宇宙の生そのものである故に、絶對にその生の力を信じ始める。

こゝに著しく眼につくことは、この信仰が生そのものに於て自己の生を、神に於て自己を、信するといふことである。こゝではもはや自力は問題ではない。自己の力を信する事は神の力を信する事であり、神の力を信する事は自己の力を信する事に他ならない。たゞ併し、その力は我々自身の工夫によつて、(我々が思ひ煩ふことによつて)寸毫も増減せられるものでない。その意味で我々は絶對に歸依しなければならな

い。しかしまた我々は生が自己の内にあることを、さうしてその生を我々が信ずるのであることを、忘れるわけに行かない。その意味で我々は自己を信ずるのである。

即ち我々はまづ「自分が生きてゐる」事に驚異し、次で、その「生」に於て總てが可能である事を信ずる——これが我々の欲する信仰である。そこには「生」を束縛する何物もない故に、また「生」を凝滞せしむる何物もある筈がない。

九

萬法はことごとく、自心にあり、自心のうちより頓に真如の本性を見よ。これを見るものは永遠に生きこれを見ざるものは遲疑と惑亂との溝に沈む。たゞ一刹那の堺が人を天堂と地獄ほどに距たらしめるのである。

しかしながら、我々の「生」本來の姿に驚異したのも、更にまたいかに多くの雜草が我々の心に根をおろしてゐるかに驚くであらう。さうして時には、いづれが我々人間の本來の姿であるかにさへ迷ひ出すこともあるだらう。けれどもかくの如き懷疑は

遂に全心を震撼した驚異を覆へすことが出来ない。絶對的なる生を感じたものにとつては、相對的なる諸の欲望や觀念は、たゞ生を不自由ならしめる繫縛としてのみ感ぜられる筈である。いかにそれが人間の自然的な欲望に見えてゐやうとも、それはたゞ一つの境に我々を繫縛するに過ぎない。我々は絶對に眞實に自由であることを欲する。自由こそは我々が努力の究竟の目標である。

自由は我々の「生」の眞實の姿である。それは我儘と放恣の意味ではなくて、眞實の無頓着を意味する。それは總ての欲望を斷離した隱遁の生活にあるのではなくして、總ての欲望に執着することなき無念の境にあるのである。我々にして確乎と自己の「生」を把持する以上、さうしてその「生」の不斷なる創造的活動を縦横に自在ならしめる以上、目前の一物を所持すると否とは、世人の賞讃をうくると否とは、何ら關はる所がない。眞實の生の力はあらゆるものの上に働くが、しかしその内の何物にも捕へられない。強て或欲望を解決しやうとするものはその欲望に捕へられ、欲望の發動を

その赴くがまゝに頓著しないものは反つてその欲望から自由になるのである。

かくの如き見地に立つて我々が日常生活を顧みる時、我欲や貪欲や色欲などに執着することがいかに我々を不自由ならしめるかをしみて感ぜざるを得ない。しかも廣大な慈悲の心はます／＼我々の生を自由にし、眞理を愛する情熱はます／＼我々の心は無礙ならしめる。こゝに我々が無頓著でなければならぬものゝ限界があるやうである。少くとも我々は、生そのものに對してまで無頓著である必要はない。またあることも出来ない。さうしてこの生から出て来る幾何かの徳操が、我々を一層自由な境界に導き入れるために、恐らくは絶對者から與へられた戒律として我々の頓著すべきもの及び無頓著であるべきものを定めてゐる。——こゝは總ての宗教が人間の道德的生活と密接に相接觸する點を生ずるのである。さうして同時に倫理學的な種々の煩悶や論争を引き起すのである。(例へば人間的愛と神的愛との葛藤、無抵抗主義の是非など。)しかしこの點には今深く立ち入るまい。たゞ右の如き戒律が、本來は自己の生

のうちからのツビきならぬ命令として湧き出でて来るものだ、といふことを云つて置くに留めやう。

——信仰の内容は正しく相對の内に示現する絶對である。自己の内に生かされた神である。「個の生として働く生その者である。それはたゞ、相對的なる總てのものに無頓著となり、我見を離れ、自他の差別を絶し、一切を含む所の虚空を心中に把握する時、我々の内に突如として體得せられるものである。

10

信仰がかくの如き内容を持つとすれば、信仰によつて自己の生が嘘のやうに強められるのも決して不思議はない。

私は再び不遜を敢てして、基督の例をこゝに引かう。試みに基督の福音を眼外に置いてたゞ彼の信仰のみを觀察して見る。年三十まで郷黨の注目をさへ引かなかつた貧しい大工の子耶穌は、一度自己の内に神を感ずると共に、(即ち宇宙の生としての自己

の自信を獲得すると共に、忽ち烈火のやうな生の高揚を以て猶太人のたゞ中に躍り出た。彼の生は人間の昇り得る最高の力と強さとにまで昇つた。神に於て總てが可能であるといふ信仰は、神の子としての彼にも亦總てが可能であるといふ自信であつた。

（かくの如き力と自信とは曾ていかなる人間にも起らなかつたのである。）

元來人間の直覺の力は、遲疑すると共にかき亂され、生が強まると共に鋭くされる。直覺によつて動くためには、必ず旺盛な自信が必要である。耶蘇は特に鋭い直覺の持主であつた。さうしてその直覺に動くに何の遲疑する所もなかつた。それが先づ當時の民衆の鈍い知力を壓倒した。彼は忽ち神通力を有する神の使として民衆の驚異の的となつた。期せずして民衆の心は彼から奇蹟を期待した。奇蹟を疑ふ者の心にさへも既に奇蹟を信じやうとする準備があつた。かくして民衆の人格は彼の力に征服され、彼の力は造物主の手の如くに民衆に働いた。實際彼は人間以上の力を現はし得たのである。我々に残された記録の示す通り、當時の民衆がそれを人間業として受取らなかつたのは何の不思議でもない。彼の自信がそれだけの力を生み出したのは極めて當然である。

自信の力強さが引起した更に驚くべきことは、彼の態度全體に現はれた神の如き權威であつた。みすばらしい大工の子耶蘇は、王の如くに猶太の民衆を跪かせたのである。さうして彼の口から出る一言一句は、不思議な穿通力を以て民衆の胸を貫き、不思議な重さを以て民衆の胸を壓した。權力ある政治家も衆望を擔ふ學者も、この乞食のやうな青年を憚らないではゐられなかつた。

耶蘇自身もその自信の故に恐るゝ事を知らなかつた。彼は何ら冒險的な心持になることなくして彼を殺さうとする人の群に近づきその中を通り抜けた。猶太人の憤怒を豫期しつゝその習慣を破り罵つた。騷擾罪にも問はるべき暴行を敢てした。しかも彼の自信ある平然たる態度は、總て彼に敵意を持つ人の力を壓服し去勢した。かくて乞食のやうな一青年は荒野の獅子の如くに猶太中を横行したのであつた。

更に驚くべきは自己の仕事に就ての彼の確信である。「人類は自分によつて救濟せられる。自分の死刑さへもその救濟の象徴である。」この事を彼は自分に最も近い使徒たちすらなほ十分自分を理解し得ない時に、些さかの遲疑もなく信じてゐた。神より遣はされた獨子の使命として自己の仕事を信する彼にとつては、目前にその仕事の効果の現はれない事などは、本當に何でもなかつた。しかしそれを、遠くない過去に於て單に田舎大工の息子に過ぎなかつた一青年の上につた事として考へれば、たゞく信仰の偉大な力に驚嘆する他はない。

基督に就てのこの様な見方はまことに冒瀆であるかも知れない。しかし私は基督の福音に大きい意義を認めると共にまた彼の信じかたに意義を認めるのも決して無駄ではないと信じてゐる。場合によつては基督を信するよりも基督自身の信じかたを信する方が、より意義深いかも知れないと思ふ。

一一

自信によつて生を強めることは、自信を右の如き意に解する時、當然我々の望まなければならぬ一大事である。自信を缺く時、人は周圍に動かされ、自らの生を散亂せしめる。自信なくして眞理を追ふ者は、たゞ先人の書を獵つて概念を得るに過ぎない。自信なくして藝術を造るものは、たゞ模倣と阿諛に流れる。これ憐れむべき生の枯渴である。たゞ自己の内にあるものを信せよ。内より出でないものには何らの生命もない。もし我々が何事かをなし得るとすれば、それは必ず内より生み出すのである。我は我々の内にひそむものを、信することによつて育てなければならぬ。

我々の「生」は我々の寶である。それは理知の測り知らない深さと豊かさを持つてゐる。我々は理知の考量によつて軽々しく自己の生を判じてはいけない。我々は自己の生がどうなるか、何を生むか、總て無知である。しかし我々は、信することによつてそれを強め得ると知つてゐる。信する者の前には山さへも動くのだ。何事を起し得るかには豫想の限りでない。

一一一

或才能に對する自信、自分が幸福になるだらうといふ如き自己の運命への信仰、などは自信である點に於て變りはないが、根柢は甚だ淺いやうに見える。多くの場合、それを裏切る實證によつて打ち碎かれ或はそれを證明する事實によつて過度に膨れる。もしくは安價な満足によつて永久にその場に生を凝滞させる。

さうでない場合には、恐らく自己の生に對する信仰にまで深められてゐるのだらう。

一一三

私は自分に許されてゐないことまでも云つたやうである。しかしそれは致方がない。元來私にはまだ信仰を口にする資格はないのだから。

私はたゞ一つのことを云ひたかつた。さうして云ひ得たと思ふ。——信仰といふ心の態度が、我々の常識の考へるよりも遙かに強く、我々の生を強めるものであることを。

一二 世間の評判

一

われは天より降りし生命のパンなり。われに就るものは餓ゑず。われを信するものはつねに渴くことなし。——これが彼の言葉であつた。蔑まれた處女の子、卑しい大工の家族、三十まで無爲に暮らした下流社會の一賤民、金なく權力なき「彼」の言葉であつた。

世人は彼を狂人視した。神を瀆すものとして教養あり名譽ある社會から閉め出した。彼の交はる所はたゞ罪人、税吏、癩病人、或は狂人である。彼に従ふものはたゞ地位なき下層社會の勞働者である。かうして彼は士君子の指彈の的となつた。彼に近づくことは、彼らの「體面」を汚すほどの不名譽であつた。

二

聰明なる者思慮ある者の言葉。

「あの男もまだ若いから、一體に云ふことが誇張されてゐる。おれは神だなどといふのもその類だ。しかし何處か人と變つたい、天分があるやうだ。或は天才といふやうなものかも知れない。評判の奇蹟なども或は本當にやるのかも知れない。さう思つて見れば、頻りに人を救つてやる／＼と「救ひ」を押しつけやうとする所なども、同情の餘地がある。けれどもあれだけ突込んだことの云へる男なら、もつと眼先が見えさうなものだ。あんなことをしたつて世間のためには何にもなりはしない。勿論病氣をなほしてもらつたものもあるにはあるだらうが百人や千人の病氣をなほした所で、この人類全體がどうなるものか。教を説くと云つたところで、何もあんな狂人じみた眞似をしないで、私たちにだつてあれだけのことは云へる。殊にあの男のやつてゐることは、まあ云つて見れば、古人の言葉の註釋だ。たゞそれを狂人のやうに怒鳴るだけの話だ。私などはとてもあの男の御恩を被る氣にはなれない。まあ、あの男の云つ

てゐるやうに、貧しいものや苦しむものだけが、何かしらしてもらへばいゝだらう。それであの男も人類のためにつくしたなどと考へて、いゝ心持におさまれるのだ。」

三

或は

「あの男はたゞ空想家なのだ。空想と實際とをまるきり混同してゐるのだ。だからあんなに威張つてゐても、どこか小供らしい可愛いところがある。しかし一方から考へれば随分可哀さうな話さ。いゝ氣になつて騒いでゐるが、先はどうせ見えてゐる。今こそ世間で評判になつてゐるけれども、この評判なんてものは當てになるものでない。本當に人氣をつないで行かうといふのならあんな風に一本調子にやつてはいけない。あれでは二三年もしたら世間が飽いて来るにきまつてゐる。そのくせ當人は實にのんきなもので、未來のために何かしたかといふと、何もしてゐない。何か確かな地位があるかといふと、何もない。人氣が落ちたらそれぎりだ。あれでもう三十を越えて

あるといふのだから、少し馬鹿々々しい氣もしないではない。

四

或は――

「あの男は實に緊張し切つてゐる。うまい食物とかいゝ女とかには眼も呉れないで、五分間でも惜しいと云つた風に働きつゞけてゐる。流行のお醫者だつてあんなに忙しくはない。さうして何の爲だ。パンの爲か。どうもさうでないらしい。あの男は誰に何を呉れと云つたこともない様子だ。では金の爲か。いやさうでもない。金は一文も持つてゐない。持てば直ぐ人にやつてしまふ。國家から榮譽を得るためか。いやあの男はそれを輕蔑し切つてゐる。それでゐてあの男は偉い政治家や仕事好きの實業家よりももつと緊張してゐるのだ。しかもその仕事はたゞ嘲笑や侮蔑で報いられるきりなのだ。一體何の爲だらう。もしかしたら、この嘲笑や侮蔑が彼にとつて最も大きい幸福であるのかも知れない。鞭うたれて快樂を感じるもの！ 鞭うたれるために絶えず

緊張してゐられるもの！ まづさう云つた見當のものだらう。」

五

或は――

「あの男に就ていろ／＼な批評がある様だが、今輕卒にそれをきめてしまふのはどうも穩やかでない。あの男はまだ仕事を始めたばかりだ。本當に天才であるか、また空想家に過ぎないか、あのまゝで押し通して行くか、また驚くやうな進歩をするか、それは皆あの男の仕上げた仕事を見てから判断すべきことだ。人の價值は棺を覆うてから定まる。さう急いで決定すべきものではない。あの男がおれは神だと云つて威張るので、方々から反感が起つて來るらしいが、さう云つて威張つた所で本當に偉い仕事をすれば矢張り偉いのだ。仕事が出来なければ、その時初めて狂氣の空想家だつたといふ事になるのだ。ごつちにしてもあの男の生きてゐる間はさうハッキリした事は云へない。もしあの男が神の様な力を持つてゐるなら、それが明確に實證されてから歸